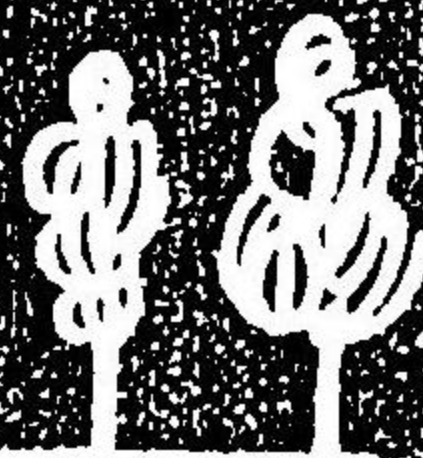
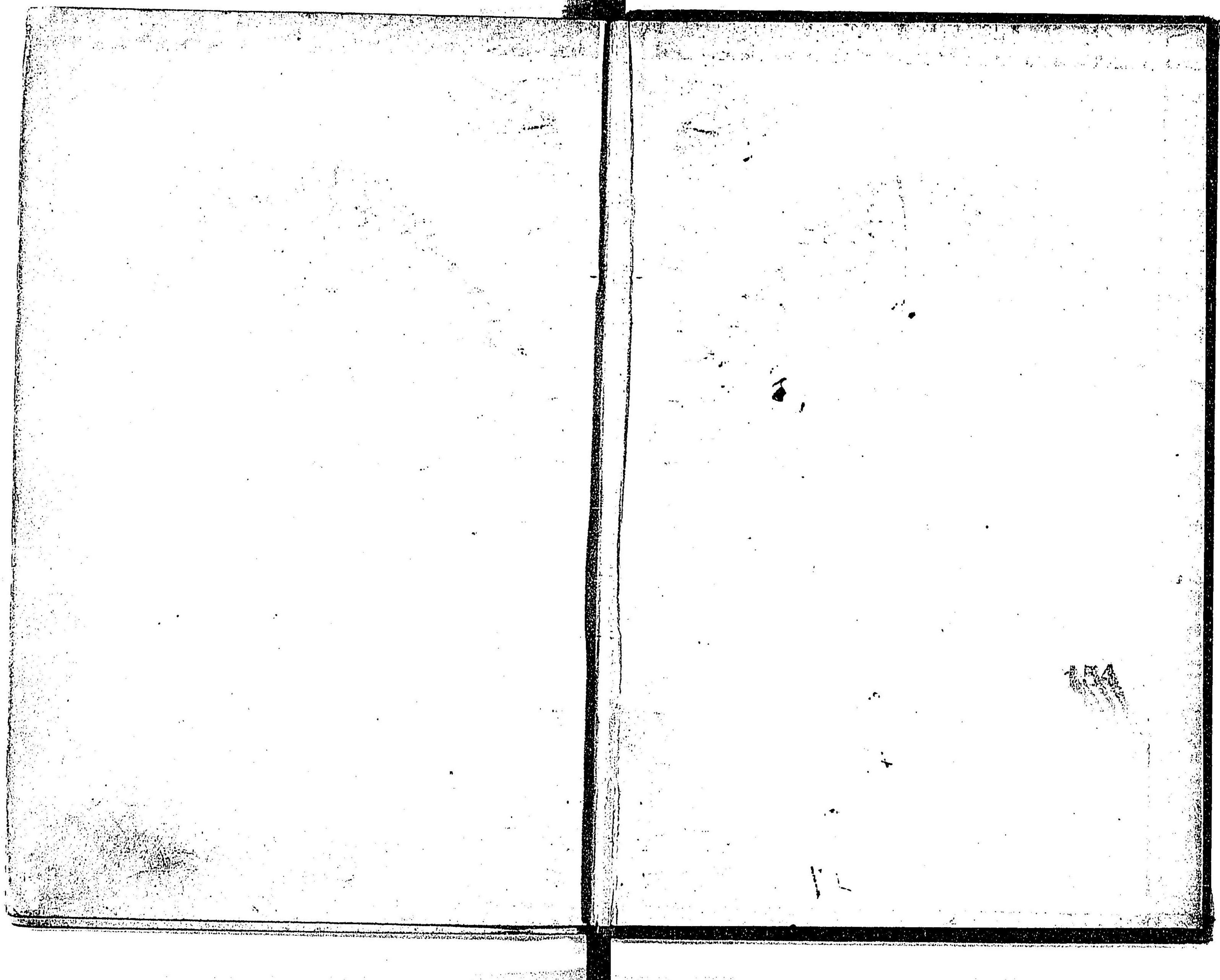


338

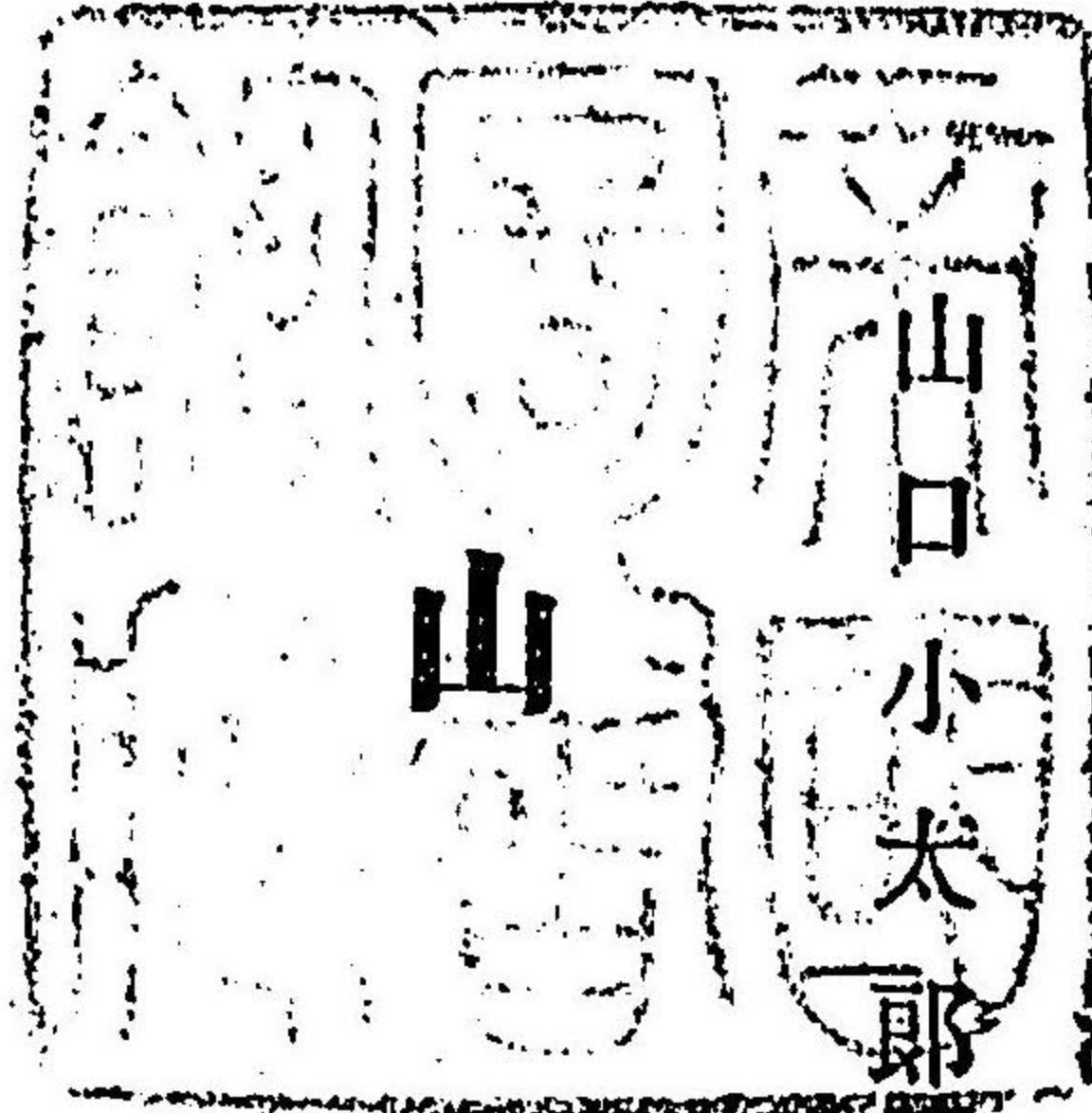
47



藝文通獨
一第
精華書



338-47

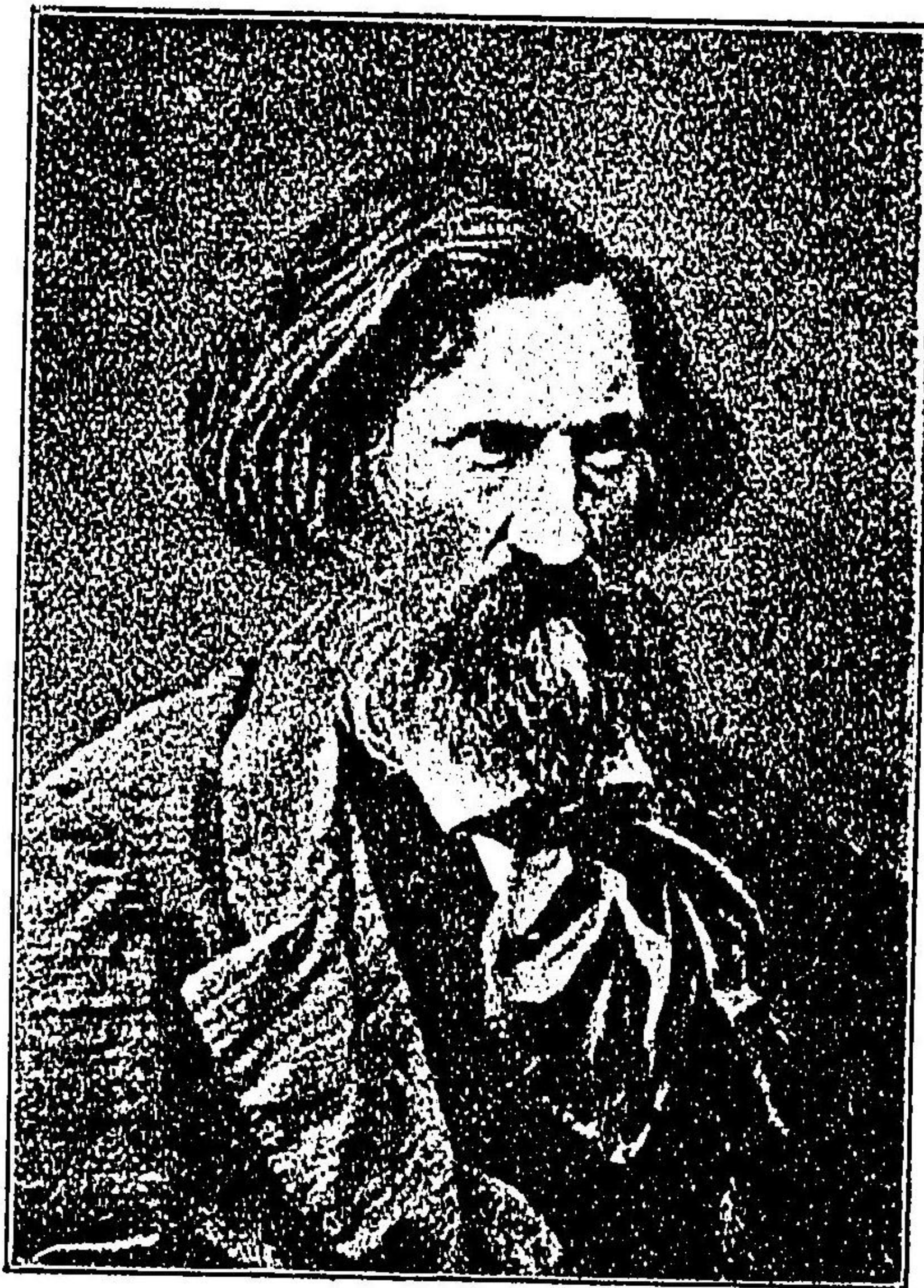


中島清譯
ルウド井ヒ作
山口小太郎
閣

守

全





山守の著者

はしがき

一 概 説

西紀千八百三十二年、ゲエテ、ワールに逝いて、獨逸文壇は、
 なほリユッケルトを有し、ウウランドを有し、シユレエゲル、ノ
 リス、シヤミツツウ、チヨツケエ亦いまだ世を去らず、即ち寂寥を
 極めたとは云はれないが、決して賑かなものではなかつた。爾後八
 年経つた千八百四十年から同六十五年までは、フリドリヒとペ
 ルとオットウルウド井との舞臺であつたと云はれてゐる。
 全體、どの國でも、古人は大概相場が決定つて居て、容易に動か
 ないが、新しい人の評價は然うは行かぬ、どうしても「時」の審判に

待たねばならぬ。尤もバウプトマンやズウデルマンの様に、比較的早く決定り相なのもあれば、ニイチエの様に、まだ八ヶ月間取ら議論されてゐるものもあるから、一概には云へぬが、大體は然うである。ではヘッベルとルウド井とは如何かと言ふに、我國の文壇では今なほ名前すらも碌に知られては居ない。況や其の作をやで、また勿論、ゲネテやシルレルの様に偉大ではないが、其の文學史上の位置は、レッシンゲン、クライスト、グリンバルト、ルンケ、ツコフ、フエネター等にして擧ぐべくば、亦ヘッベル、ルウド井とを洩す事は出来まい。

フリードリヒ・フグトとマクス・コホ両氏合著『獨逸文學史』(全二冊、マイエル版)には、ヘッベルは褒めてあるが、ルウド井の評價は好くは書いてない。ルウド井はヘッベルの模倣家で、ヘッベ

ル自身も然う云つたとある、而して其の文學的價値は極く少いと云つてある。又ゲネテも、今後の獨逸文壇は、沙翁から有益な影響を受ける事は無いであらう、餘り深く研究するのは考へものだと云つたのに、ルウド井とは沙翁の崇拜家ではないか、だから拙劣な無理はない、と云はぬばかりの書き振だ。けれどもこれは正當な批評ではないと思ふ。一般に、此の兩人を思想上の親戚だとは云つて居るが、一方を他の模倣家といふ定論のない以上は、聊にても若し異を立て様と思ふならば、其を立てべき理由を述べ、責任ある學者の態度であらう。次に、沙翁研究の事に關しては、ゲネテはゲネテの意見を述べ、ルウド井は亦自己の藝術觀から來てゐるので、差支へは無い事だと思ふ。彼は急進し、ヘッベルもルウド井もロマンチックから出發し、彼は急進し、

此れは徐々に寫實主義に入つたのである。彼は出来るだけ純粹なる客觀を要めた、作者が作中の人物の口を借りて、自己の思想を述べるが如き事は、絶體に排せねばならぬと云つた。此の點から彼はシレルを難し、沙翁を讚嘆した。又、ゲエテやシレルや、なほ其の他のロマンチック派の者が、『美』を『眞』と『善』とから分離させやうとするのは不自然な事で、一個の或物は其の物としては自ら一個の完全を保つてゐるのだと云つてゐる。而して、悲劇の生成に關しては、運命が人を左右するのではなくて、人は自ら其の性格によつて運命を作り、そして自ら其の渦中に翻轉するものだと云つてゐる。此等の觀察は『山守』の曲中に充分に認める事が出来る、これは殆どその必然の成果たる神秘を考へずにはゐられないので、これまた、曲中に窺はれる事だが、その詳細は『山守』のみに對する我が管見を述べる所

に云はうと思ふ。けれども、無論これ等だけでは作風の如何は考へられぬ、實際生活の影響を観察せねばならぬ。

ヘッペルは交友が餘程多かつたが、ルウド井ヒは其の反對であつた、稍もすれば隠遁者のやうな傾きさえ見えた。此れは内部個性の差にも由る事だらうが、ルウド井ヒが蒲柳の質も與つて大に力ある事で、數度病の爲めに苦められ、床に就かぬ時でもその爲め不愉快な日を送つて居た事は尠くない。彼にして、も少し健康が勝れて居たならば、それ丈でも必ず彼の作に一層の見るべきものが出来たであらうし、而して盛に交際をしたならば、尙彼自ら得る所もあつたであらうに、惜い事だ。次に彼は、ヘッペルに比すれば遙に安樂な生活を送つた、ヘッペルの様に苦しい闘ひをする必要はなかつた。彼は幸福な人であつた、而して不幸な人であつた。

なほ、たゞ報告的に云ひ度い事は、ゲエテは劇作家としては遂に
 シルレルに及ばず、又、外國ながら北歐のイブセンは小説としては
 ビヨルンソンの如きものを有たぬ事で、彼等の生活の幸不幸、境遇
 の順逆は人の既に知る所だから一言を要さぬが、我がヘツベルに、
 小説として見るべきものは殆どなく、ルウド井ヒの「天地間」や「バイテ
 レタイ」は、共に長篇でもあり、内容も尊重すべき作物たるを否み難
 い。この事實ははるかの微妙な心理作用の發現ではないかと思ふ、
 それでもルウド井ヒは全力を劇に注いだ。

二、略傳

上

ルウド井ヒは千八百十三年二月十二日、ウエラア河畔、索遜マイ

ニンゲンのアイスフェルド市に生れた。父はエルンストフリイドリ
 ヒルウド井ヒと云つて、市の法律顧問で、同時に辯護士であつた、
 詩人が後に言つた通り、極く名譽心の強い、頑固な位の厳格な性質
 で、精力は溢れ、それであつて内心は極めて優しい、涙にもろい、
 此の山守の主人公みたやうな男であつたとの事。母は商人で市會議
 員たるオットウといふ人の娘、名はソフイイクリスチアと云つて、
 共に上流の市民であつた。夫婦の間は至つて睦しく、頗る幸福な家
 庭を作つたのであるが、ルウド井ヒの前に二人、後に一人の都合四
 人の子を擧げた。然るに前の二人は生後間もなく死し、残る二人も
 決して壯健の質ではなかつた。

當時家計は豊かな方で、詩人の生れた翌年、父は地所を買ひ入れ
 自分の考へ通りに頗る贅澤に壯大なる庭園を拵へさせた。これは屏

弱い小兒等の養育にも爲になり、また、園内に建られた一棟も、後に此の詩人には頗る重大な役をなしてゐる。父は峻烈に過ぎる性質のために、市民の多数からいたく憎まれて、幾多の陰謀を企てられた。官金費消罪として訴へられた時は、市民は中央政府の検査官の臨検を請ふたが、検査官は却て此の顧問官の冤罪を證明した。彼等は器々として検査官が不正だと罵つた。其後聞もなく、市に火事が出來、千八百二十二年七月七日、そして、これが顧問官の罰の爲だと、誰云ふとなく云ひ出し、消防の方法は何の功をも奏せず、多くの官衙も民家も焼けてしまい、ルウド非ヒの家も灰になつた。此の晩、顧問官夫人が救ひ出した市の金庫は、開かれて、内容は盗み去られたのである。律義一徹な顧問官は、これも自分の責任だと謂つて、自家の財産を擲つて其の損害を償ふ事にし

たが、市民が何の位ゐるまで此の人に對して悪事を働いたかは、此の金庫の事だけでも明かだ。けれどもなほ足りないと思つて、損害賠償の要求は餘りに残酷であつたため、顧問官はそれを苦にして病氣となり、千八百二十五年一月廿日、遂に不歸の客となつた。母は小兒等を伴つて、自分の弟オットウと云ふ富有な商人の家へ越した、オットウは獨身者であつたから、ルウド非ヒの母は、弟の家政を處理してやる事にした。此家のみが彼女にとりて唯一の隠れ家でもあり、又小兒等の將來を安心して考へて居られる所でもあつた。而して、庭園と、少し許りの恩給の外には、彼女に収入とでは、外に失くなつた。顧問官の未亡人は物事に堪能で、よく道理を辯へて、過失のない、而して優しい、想像力の豊かな性質であつた。ルウド非ヒが最初詩の

弱い小兒等の養育にも爲になり、また、園内に建られた一棟も、後に此の詩人には頗る重大な役をなしてゐる。父は峻烈に過ぎる性質のために、市民の多数からいたく憎まれて、幾多の陰謀を企てられた。官金費消罪として訴へられた時は、市民は中央政府の検査官の臨検を請ふたが、検査官は却て此の顧問官の冤罪を證明した。彼等は罷をくとして検査官が不正だと罵つた。其後間もなく、市に火事が出來、千八百二十二年七月七日、そして、これが顧問官の罰の爲だと、誰云ふとなく云ひ出し、消防の方法は何の功をも奏せず、多くの官衙も民家も焼けてしまい、ルウド井ヒの家も灰になつた。此の晩、顧問官夫人が救ひ出した市の金庫は、開かれて、内容は盗み去られたのである。律義一徹な顧問官は、これも自分の責任だと謂つて、自家の財産を擲つて其の損害を償ふ事にし

たが、市民が何の位るまで此の人に對して悪事を働いたかは、此の金庫の事だけでも明かだ。けれどもなほ足りないと思つて、損害賠償の要求は餘りに残酷であつたため、顧問官はそれを苦にして病氣となり、千八百二十五年一月廿日、遂に不歸の客となつた。母は小兒等を伴つて、自分の弟オットウと云ふ富有な商人の家へ越した、オットウは獨身者であつたから、ルウド井ヒの母は、弟の家政を處理してやる事にした。此家のみが彼女にとりて唯一の隠れ家でもあり、又小兒等の將來を安心して考へて居られる所でもあつた。而して、庭園と、少し許りの恩給の外には、彼女に収入とでは、外に失くなつた。

顧問官の未亡人は物事に堪能で、よく道理を辯へて、過失のない、而して優しい、想像力の豊かな性質であつた。ルウド井ヒが最初詩の

感興を誘致されたのも、此の母のお蔭で、獨逸の大家の作物や、又殊に自分の好きな沙翁の作を、其の小兒に話して聞かせ、悦ばしてゐたのである。けれども又もや不幸な事には、末子は二十八年に世を早く去つた。母は、此の才藻豊かなルウド井ヒも、未來は何うなるであらうと氣遣はずにはゐられなかつた。

ルウド井ヒの最初の教育は、父の家庭書記たるアムブルンに受けた。十三才(千八百二十四年)から市の學校に入つて、シヤラアやベエルなどの友達と共に通學してゐた。十五才の時、母は自分の弟には反對して、學者にしようと思つて、ヒルドブルグハウゼンの高等學校に入れる事にした。叔父は自家の手傳ひにし度いのであるから、反對して一切學費などの補助はせぬ事にした。であるのに、ルウド井ヒは詩ばかり作つて、學科には力を入れないから、成績が餘り

善くない、それで母にも何ぶも無駄らしくも思はれて來たし、又段々と老ひ行く年であつてみれば、今後長く仕送りをする事も覺束ないと心細くならぬ譯には行かなかつた。

内氣な、柔順な少年のルウド井ヒは、母の言葉通りに、やりかけた學業を止めて、二十九年、アイヌフェルドに歸つて來た。而して叔父の商方の手傳ひをする事に決めたが、叔父は逆も此の小供が商人として立派な者にはなれさうな見込みもないので、家で、音樂なり、文學なり、ルウド井ヒの好いてやる事は許して置いた。そこで、彼が最も勤んでやつたのは音樂で、市の學校で、モルゲンロウトと云ふ音樂家に就いて學び、モルゲンロウトは、頼母しい少年と思つて、懇切に教へた。ベエルやシヤラアも同じ嗜好の友達で、一緒に熱心に研究を積んで行く内に、母は三十年に肺を犯されて以來、容體が

何うも宜しくなく、ルウド井ヒの孝養看護に缺くる所はなかつたけれど、段々と悪くなるばかりで、翌年の冬十一月二十一日、遂に再び逢ふ時はない事になつて了つた。

すると、間もなく、叔父の家には、新に家政を整理する婦人が備はれて、此の婦人が漸々勢力を得る様になると、今迄の風がすっかり變つて來た。此事だけでも面白くないのに、自分の嗜好と商人の生活法とは何うも折合せず、又、其の上、叔父と此の婦人との親密の度が強くなるに伴つて、財産の相續も見込がなさうになつて來たので、もう辛抱が出來ず、三十二年、アイスフェルドより東方九百キロ米突、人口一萬四千五百餘、同じくマイニンゲン州にあり。ザアルフェルドの中學校に入學した。けれども規則立つて教育は彼には適當しなかつた。彼自身同校在學中の事を書いたものに、「身體

も苦しいし、精神も弱り切つて、樂しみといふものが無いから、わが詩の才も盡きそうに思はれる、云々と弱音を吹いてゐる。

で、今後は全然音樂にのみ力を入れやうと決心して、三十三年、再びアイスフェルドに歸つて來、冬だけは叔父の家で、春夏秋の三季は、父に譲り受けた彼の遊園内の建物内に、氣の合つたシヤラアやベエルと共に暮した。彼の少年時代の最も幸福だつた時期は此時で、朝から晝までは勉強の時間、ルウド井ヒは廣間のピアノに向つてゐるか、然らば机に凭つてオペラの譜を作つたりしてゐる、シヤラアは散文的の考査にかゝる、晝は噴水の傍の亭に休憩したり、石段の間に見えがくれする蜥蜴を觀察したりして遊んでゐた。午後には、また、クラシクな歌劇の演奏をはじめたり、理論を研究したり、自作の譜を樂器に上せて試みたり、其他の練習などをやつた。

夕方から夜にかけても、大抵同じ風な事をして、面白く、楽しい生活が続けてゐた。而して此の頃から、既に一方には詩作にも忙しくなり、劇をも試み、歌劇をも作つてゐた。

夏季は斯んな風に全く氣樂な生活をやつたが、冬季は叔父の家に來て、例の婦人との折合が彌増に面白くなつて行く。それでもルウド井ヒは出来るだけ辛抱して、調子を合せ、家業を助けるのであつた。

其の頃の彼の多くの歌劇は計畫に止つた、殆ど未成品のみだ、たゞ『黄金の鍵』のみが詩句共出来上つた者である位のもものだ。而して、音樂に耽れば耽るほど、一方には詩の感情が溢れて來た、さうも歌曲では満足の出來ない事も度々であつた。

千八百三十六年の冬、アイスフェルドに歌劇場が建つと、ルウド

井ヒは其の監督となつたが、此事は何様にルウド井ヒの鼓舞奨励となつたであらう、その年の秋以來とりかゝつてゐた『同胞』の歌劇を完成して、翌年四月三日第一回目の興行、同九日第二回目の興行となつたが、此地方一圓の好評を博した。詩人は尠からず悦んだ。けれども、一層技を研ぐために、ベルリンかドレスデンか、若くはミンネンヘンへ行かうと思つたが、叔父は容易に承知して呉れぬもつと著しい結果でも見た上でなら兎も角との事、ルウド井ヒは彼の出資を仰がすには未だ其事が出来ない。それで、此度は『炭焼女』といふ曲を作つた、これは前のより長篇でもあり重みがあつて、三十八年の晩秋に、アイスレエベンで興行したが、一層の好評を博する事を得、爰に實際の成績を證據立てる事が出來た。ケッセルリングの御用書肆は、ルウド井ヒの詩集を出版せん事を請ひ、マイニンゲンの軍樂

長キツアルトは、此の曲を見た後、彼れルウド井ヒをマイニンゲン公に推薦した。ルウド井ヒは、以後三年間、ライプチヒでメンデルスツウンに就いて學ぶべく、學資金を戴く事になつた。けれども彼のライプチヒ生活は思はしくなかつた、ルウド井ヒは既に自作のオペラもあり、はや一家をなしてゐるので、メンデルスツウンとても然う思つて遇したのではあるが、彼はルウド井ヒの曲風に同情を有たない、でルウド井ヒに對しては、自ら作曲するよりも、先づ充分に聞き、充分に學び、而して趣味を養はねば不可と忠告したが、ルウド井ヒはあまり命を奉じなかつた。演奏會や觀劇には成るだけ行くやうにとも奨められたが、マイニンゲン公の學費だけでは、贅澤な事はされなかつた。交際は避けて、寂しい生活をしてゐたのである。加之、彼の健康も餘程害はれて、三十六年以來惱

んでゐた腦病のために、時としては、ピアノに向ふ事も出来ない様にさへなつた。けれども此の時も、彼が心密かに悦んでゐた事は、胸に作詩の感興の頻りに湧くのを覺えた事で、いろいろと、豊富な作の企畫をも爲たのである。惜い事には、病氣は益募つて、遂には床に就かねばならなくなり、やつと數週の後、杖にすがつて外出の出来る様になつた位である。で、又作譜に立返つて『青き驛』に着手したが、彼の一方に於ける詩興は愈々溢れて來た、而して此の歌劇に關する彼の手記には、彼が歌劇の改革を夢み、樂劇と普通劇との溶和といふ様な、無論彼には解決され得べきではなかつたけれど、兎も角も斯んな問題が仄いてゐるのである。詩興に驅らるれば驅られる程、愈増に彼はライプチヒ生活の冗贅にして不愉快なるを覺えてゐたが、メンデルスツウンもルウド井ヒの爲めに、マイニンゲン

で勉強する方が却て遙に優つてゐると勸めたので、もはや此のプラ
 イセ河畔の都市は此の詩人を留むるに足らず、十月の末、マイニン
 グンへ行つた。此所では自己の音楽の道途に、何とか實際上の効果
 を收め度いと望んでゐたのであるが、是が不可能となつたので、亦
 此の地をも去つて、十一月、故郷マイスフェルトに歸つた。
 歸つてみると、故郷も彼に温かではなかつた。人々は皆輕蔑の眼
 を以て遇し、襤褸を着て郷に歸つたものとして彼を見た。友人も離
 れた。叔父の家は亂れ、例の婦人は既に取父の妻になつて居り、酒
 を飲んでは大亂痴氣を演ずるといふ始末で、ルウド井ヒは居を例
 の遊園内に定めた。シヤラアに與へた手紙に「もう君と僕とたゞ二人
 きりになつた、餘人は誰であれ、居て貰ふより去つて貰ふ方がどん
 なに悦しいか知れぬ」と言つて居る。時々、眼の焮衝を病んで、爲め

に勉強を妨げられた事も少くはないが、彼は詩の春潮の胸に漲り鳴
 るを覺えて、嬉しい未來を描いてゐた、遂に決必した、今後文學專
 攻をやらうと。たゞ、一寸爰に疑問なのは、今後文學專攻といふ條
 件でも従來通りマイニンゲン公の學費は頂戴できるものか何うかと
 いふ事であつたが、相談してみると、何か一つ文學的作物を出さし
 て、その出来映えを検した上で兎も角もとの事に、丁度其頃出来上
 つて居た「婢僕解放」を提出した。頗るの上首尾で、では四十三年の耶
 蘇復活祭まで繼續させるとの恩命に預つた。ルウド井ヒの事業は爰
 に一段落を告げる、時に三十歳。

下

何故にルウド井ヒは音楽を棄て、文學に赴いたかの理由は、彼
 自ら「もはや僕には音楽の朦朧は満足出来ぬ、僕は形體を要する」と云

つた言葉に盡されてゐる。而して此の形體の語は、彼が空想を避けて、實際の性格を描くに努力した事實を語つてゐるのである。で、四十二年の五旬祭の時、又もやライプチヒへ來た、『アイスフェルドは、既う懲りた、こゝでは迎も作物に従事する事は出來ない』

今回のライプチヒ生活は前とは著しく變つた、前回は豫期してゐた音楽も思ふ様に行かず、大變不愉快に思つてゐたのであるが、今度文學専門の覺悟で來てみると、今迄嫌ひだと思つてゐた市や市民に對する感情は自ら一掃され、詩作の感興に驅られて來て、以前のやうな寂しい行路は取らなかつた。ラエエルニッツのゴットフリド・ドゥエツツスタイン博士との親密な交際は、以後永くルウド井ヒのために獎勵となり、又ハインリヒラウベはルウド井ヒに屬望する事深く、ルウド井ヒに取つて亦價值少からぬ交際であつた。嘗ては「ラ

イプチヒの書籍を多く製出するは、住民の閑散無聊なればなり」と言つた彼は、今は「如何に感興多き人々ぞや、詩人の切要條件たる觀想到に最も豊饒なる材料を供する地はライプチヒなるかな」と訂正せねばならなかつた。

けれども勞作の結果を金錢にかへる事には、此等の交際も無論助力の資格を缺いでゐて、『アウグスブルヒの天使』も『婢僕解放』も、數月間持廻つたが駄目であつた。『願ひの三つ』といふ物語も此時思ひ付いた作である、『マリア』といふ短篇小説も、『ハンスブライ』といふ劇も亦此の時のものであるが、全力を傾けてゐたのは劇の方で、其の腹案は澤山に首を擡げて來た。新聞に劇評の筆も執つてみたが、これは世人の意を迎へる事が出來なかつたため、評判が悪く、ルウド井ヒは其の駁論をも書いたが、若年者の潜越など排斥された。ルウド井

とは新聞は大嫌ひになつた。製作によつて生活を續げ、而して其の進境を望むには、ライプチヒは適當の地でないと思へ、ドレスデンへ行つたならと思つて、故郷の叔父に手紙で相談してみると、然う考へるのなら、今ドレスデンの宮廷劇場に名を擧げてゐる女優カロリネ・パウエルは遠縁の者ではあり、聲望あるルウド非ヒ・チイクの家とも交際してゐるのであるから、彼女に話してみぬかとの叔父の返事に、ルウド非ヒは早速「アウグスブルヒの天使」の原稿を彼女に、亦別に一封の手紙をチイクに宛て送つた。

女優は心地よく承知して、原稿もチイクに渡し、親切な返書を出した。そこで、ルウド非ヒは、チイクは今將にベルリンに移らうとして、もはやドレスデン劇場に關係して居られる場合ではなかつた

けれど、兎に角暫時行く事とし、千八百四十三年の春から一年間ばかり滞在した。「アウグスブルヒの天使」の興業を見たい願望であつたが、此地の劇場監督たるフンリユッ・チャッハウ氏の爲めに、政治的顧慮で以て止められた、と謂ふのは、此の索遜宮廷と因戚の關係あるバイエルン宮廷に對し、此の劇を興業されぬ事情があつたとの事けれども彼は此の滞在中、女優から何や彼と便宜を與へられて、屢々觀劇に行き、刺戟を受け、益する所尠くはなかつた。

同じ年の八月十一日、故郷の叔父は此の世を去り、其の遺言によつて、其の財産の一半を譲り受ける事になり、それで、尙數年間は衣食の顧慮なしに製作に従事する事が出来る様になつた。

翌四十四年の秋には、又ライプチヒに歸つたが、其前、數ヶ月の間、ルウド非ヒはマイセン附近の青葉若葉の匂ひ滴る美しい裕間に

滞留をした、故郷の様な氣持になつた、戀人を得たのは此所である、マイセンの一市民の娘、名はエミリー・非ンクラア。彼女自らの書いたものによると、彼女は父と一緒に、此の繪のやうな路間の道を散歩してゐた時、恰も初夏の午後の事、麥葉帽の大きいのを被つた立派な男に逢つた、軽く會釋を交して過ぎたが、父が振りかへつて見ると、男も立止つて見てゐた。二三日後、又父と娘は同じ路をやつて来て、娘だけは草花を探しに少し先になつて、毎度自分達のお氣に入りの場所へと急いで行くと、下度其處に、木の葉の蔭になつて、柏の大木の下に、件の男子は休憩してゐる。立上つて挨拶はしたが、二人とも黙つて、たゞ何とはなしに感に打たれて居ると、父がやつて来たので、男は言葉を掛けた、而して交際を乞うた。誠に美しい、ロマンチックな戀であつた。同じ夏の中に婚約は出来た。「林中吟」の

『思ひ』(Siedenkt)を譯出する。

さしうつむきて、言葉なき。
 いらへに燃えぬ、頬のほてり。
 酔ひぬ、餘りに、あゝ、あまりに。
 せめて、汲めかし、我が君よ。

製作の熱は益高まつて来た、就中國民劇「普王フリドリヒ第三世」はライプチヒに歸り着くや否や、八日の内に書上げたもので、市の劇場に上せ度い存念であつたが、當時の劇場と観客の好尚に向かなかつたため駄目であつた。そこで次には流行をも顧慮して一作に着手してみたが、彼の詩に對する良心は到底、時流の要求に適すべくも思はれなかつたので、止して了つた。
 夏は彼の路間で、冬はマイセンの市に出て、熱心に作に従事した。

長篇小説「老校長の生活」にも手を着けたが、これは完結しなかつた。夏から始めた「心の権利」といふ劇を了へて、十二月、ドレスデンの脚本作家デヴリエントに贈つた。デヴリエントは少からず興味を覺えて、之を舞臺向きに書きなほす様にと勧めたので、其事に着手してゐる内に、デヴリエントは其の職をやめねばならぬやうになつて、爲めに此の作を場の上せる事は望みがなくなつた。クラカウ一揆のため、矢張政治的願慮といふ傍杖を喰つた譯で此の作は波蘭貴族の讚美だから可くない、との事であつた。

此の事でルウド井ヒは、以後永くデヴリエントと親くなり、四十七年の冬は、ドレスデンへ行つた、併し爰に長く閑散な愉快を食つてゐては、立派な作物の見込はないので、二箇月の後はマイセンに歸り、戀人の家で「スクウデリ夫人」と「プファルロウゼ」を書き了り、又

「山守」の最初の草稿たる「非ルム・ベルント」を企圖したのである。

千八百四十八年の佛蘭西二月革命は、獨乙にも烈しく影響して、ルウド井ヒも獨乙自由主義の覺醒に頗る望を屬してゐたが、經過は遂に何物をも齎らさなかつた。又、彼は教師か圖書館員にでもなり、一定の生活法を得た上で、製作にかゝらうかとも思つたが、彼の休まない筆は此時己に「山守」の仕上げに忙しいのであつた。而してパンの要求よりも切ない製作の欲望を覺えた。書き上げた此の作を、七月デヴリエントに送つたところ、デヴリエントは感心し、又、一般の文學界に噴々の評判を齎した。で、ルウド井ヒはドレスデンに行くと、もう人々を訪問するよりも、訪問される方で、フライタアハヤアウエルバハ等の如き、一流の大家と肩を並べて交際するやうになり、殊にアウエルバハの如きは彼を益する事少くはなかつた。

今やルウド非ヒは、交互にドレスデンの市内と郊外に住んで、劇の創作に餘念はなかつた。其の一部は腹案や断片やの未成品で終つたが、一部は完成されて、獨逸文壇を裨益した事は誰も否定せぬ。しかし彼自らも云つた通り、售らうと思へば顧客の意を迎へねばならず、デヴリエントの勸告にも従つて改作をもしてみたが、それは駄目であつた。デヴリエント自身さへも其の結果を好じとは見なかつた。

次に取りかゝつたのが『マッカベエル』。病氣は邪魔をして、筆を執る間がない、それでも辛と作り上げた。此の劇は千八百五十二年の末から翌五十三年の始めにかけて、所々方々の劇場で演ぜられた。ルウド非ヒの名聲は到る所に喧しかつた。

五十二年正月廿七日、戀人と結婚の式を挙げ、平靜な、楽しい生

活を送つた。冬は大抵ドレスデンの市中に住んだ、此の方が郊外生活よりも、彼に藝術的感興を興へる事が多く、ために必要欠くべからざるものとなつた。此の年の末には既に一子を設けた。交際は廣くはしなかつたが、撰擇したものであつて、劇場にも行き、奏樂會をも訪うてゐた。其後また『アウグスブルヒの天使』や、尙ほ他に二三のものに手を着けてみたが、どうも出来がよくない。却て此の頃は小説に氣が進んで、『ハイテレタイ』や『天地間』が出来、殊に『天地間』は優れたものである。

詩論が盛になつて詩が衰へるといふ事は、我國の文學史にも著しい事だが、此事はルウド非ヒ一家の作に於ても同然であつた。此頃から彼は劇の理論を索め、殊に沙翁を讚美し、殆ど沙翁のみによつて作劇の法則を尋ねやうとした。其間にも創作の情熱は屢彼を促し

たにも拘らず、一時は全然創作の筆を棄て、理論の追求に専心であつた。けれども彼の健康状態にして良好であつたならば、此の迷路に窘蹙して居る事はなかつたであらうに、六十年以後は殊に重くなり、筆を執る事の出来ぬやうになつたのは數度である。それに外部生活の不如意までも手傳ふ。千八百五十六年、バイエルン國王より、總額七百グルデンの獎學賜金の恩命に接した時は、又、光輝ある將來が浮んで、『僕が作詩の情熱は再び眼醒めた。理論と實際、批評と創作の間隙を越え、抽象と反相の塵埃を拂つて高翔するには、此の情熱は欠くべからざるものである』とは、當時彼が友なるモウリッ・ハイドリヒに與へた手紙である。此の手紙は、また彼が邪路に陥つてゐた事を、自ら如何に切に覺知してゐたかを證するに充分である。ところが病魔は直ちに彼を襲ひ、その癒えた時は、又却て活計

に心を痛めねばならぬ時であつた。財産は漸を追うて減じ、バイエルン王の賜金も尙一年となつた。五十八年には、アインスフェルトの遊園と其の建物も賣らねばならぬ事になり、數年以來訪れずにあるのではあるが、彼に取つては此の賣却は餘程辛かつた。翌年「山守」と『マツカベエル』を、再び數多の劇場が演ずる事になり、又シルレル協會やチイドグ協會等よりの補助で、一時の窮は救ふ事が出来たが、偉大な作品の此の詩人から要求するには到底足らなかつた。殊に六十年以後は間斷なく病氣のために惱まされて、壞血病の上。癩癩質斯まで起つてゐた。殊に左の膝は餘程の重態であつた。神経痛も起つた。餘儀なく一寸動いても痛く、患部を軽く觸つても堪へ難く、觸らずにさへ、痛苦は内部に深く籠つて、終日殆ど呻吟してゐた事もある。手足も我が物とは思はれず、我ながら、生きてゐるのか死

んでるのか判らぬとは、彼が自ら言つた事である。六十一年以後は外出は出来なくなり、六十三年後は室内だけを歩む事すら叶はず、殆ど一年間床上に苦み、千八百六十五年二月二十五日、遂に永久は来つて彼を拉し立つた。

病中と雖、彼はなほ創作を止めなかつた。其の頃出来たものゝ内には、彼の作中で最も深刻で、亦最も美しいものゝ部に屬するものがある。悲劇『ゲノエヴ』『マリノ』『メツシナの商人の娘』『アルブレヒト』等、皆着手し、若くは計畫した數々である。殊に、以前手を着けた『ベルナウエル』を再び取り出して、更に全く新しい、眞純の意味を附與した。又、同じく企てられた悲劇『チベリウス・グラックス』の第一幕は、彼が最終の詩篇であつて、以て彼が實際の作詩能力の偉大を伺ふに足るさうだが、惜い事には、天は彼をして此劇の完成をなさ

しめなかつた。

ルウド非ヒは内氣な、温和い、慎み深い男であつた。不平な事があつても、外物に依て鬱を散じやうとするのではなく、自ら内に省みて安心を得やうといふ質であつた。彼の友シヤラアは、彼が小年時の事を書いて、彼を蝸牛の様だと云つて居るが、引込んで思案するルウド非ヒの性質を指したものである。此の傾向は、彼が交友の少數だつた事、而して又自ら稍もすれば隱遁者のやうに見えた事に原因となつてゐる。而して晩年に至る迄殆ど變化がない。思想の變遷は無論ある。彼の全人格を根底より動搖させる様な内部生活の激甚は彼には無い。これは吾々の慄す思ふ所であるが、注意すべき彼の言葉がある。曰く「余は余を敵とする者をも愛する弱點を有す、何となれば、彼等が余を理解せざるを思へばなり」と。而して、此の眞

の愼厚温良の資質は、彼が晩年病苦中の作に於てさへ、敬虔にして
 安靜なる内心の欣喜を彷彿せしめた唯一の因である。彼自らユリア
 シンシュミットに手紙を寄せて曰ふ、『足下、余を以て内心の愉快を失
 ふ者と爲す勿れ。人生は美なり、一般には醜陋と思惟せらるゝ部分
 さへも、余に取ては美なり。世界は莊嚴なり、余に於ては此等の光
 彩は毫末も消失する事なし。こは習慣の力に因るか、若くは物理界
 に些の空虚なる間隙をも許さぬが如く、人間情緒の充實の致す所か、
 余は之を知らず。——然れども、余にして若し余以外の者たるを欲せ
 んか、これ自ら欺くなりしと。』

(略傳をはり)

山 守

ル
ウ
ド
井
ヒ
作

中
島
清
譯

登場人物

シユタイン。——有福なる地主にして且某製造所長。

ローベルト。——シユタインの息子。

クリスチアーン、ウルリヒ。——繁葉が森の監督者、『累代山林守』の
稱を負ふ者即ち此。

ソファイイ。——山林守の妻。

アンドレエス。——同長子。山林監督助手。

マリイ。——同娘。

井ルヘルム。——同第三子。

井ルケンス。——ソフイイの叔父、豪農。

僧。——森田村の和尚様。

メラア。——シユタイン商會の番頭。

ゴットフリイド。——渾名「書物獵師」。

ワイラア。——山守宅の材木番。

峠茶屋の亭主。

フライ。——山林泥棒。

リンドンシユミイド。——同。

カトリチ。

バスチアシ。——シユタイン家の僕。

棺舁、二人。

場所

繁葉が森の山林守宅、森田村シユタインの邸、峠茶屋及び寂冥路にて。

第一幕

繁葉が森、山林守住宅の場。

後方に双扉の開戸、棚、其の兩側に入口がある。右方窓。後方の左方に煖爐。すつと前方にシユワルッワルド製の大時計。戸口の横木には種々の銃類中には双身のものもある、獵袋其他の獵具と共に架けてある。書物臺には、聖書や唱歌の本が戴つてゐる。

第一場

樂屋には樂手の彈奏を聞く。

材木番のワイラアは中央の入口より、緩りと左右を見ながらは入ッて来る。同時に山守の妻のソフイイは忙しげに左手より來合せ。次に其の息子のアンドレエスと井ルヘルム。最後にマリイがは入ッて来る。

ソフイイ 樂手達はもう來てゐたのね。妾は窖倉の鍵を何處に置いたか知ら。樂手達にお酒を出さなくちやならないのに。——オヤ、ワイラアかい。

ワイラア ハア、そのワイラアだよ。爺さんは何處へ往つたかね、あの山守どんはさ？

ソフイイ 家の人かい、外に居なかつたの？

ワイラア 木挽等の事で話がしたいがねエ。

ソフイイ 待つてゐたら可いちやないか。

ワイラア 待つて？ とんでもねえ、仕事に追はれて忙しくてしやうがないわな。

ソフイイ そんなら早く行ッて探して來なさいよ。

ワイラア (香氣に陶器の煙管に煙草をつめながら)。ええ。

ソフイイ 家の人は多分あのシユタイン様と一緒にだらうよ。

ワイラア 成程。道の砂は火曜日に撒いたし、花飾も戸口の所に爲て置いた。今日はロトベルトさんと家のマリイちゃんのだ許嫁の日だね。あのシユタインが愈舅殿となる段になりや、益々兩家は親密になる譯さね。いや、其ばかりしやねえ、シユタインは此の地所

を買った、そしてウルリヒがその山守さ。あの、市の肥った辯護士が昨日ちやんと其の交渉は済したつけ。シユタインも今朝から此の繁葉が森の旦那といふ譯さ。

ソフイイ 此方へ卓子を運んでお呉れ。

ソフイイ (ソフイイと二人で卓子を左の方に運びよせながら) シユタ

インの老人が旦那になつて、加之舅殿になるといふと、ウルリヒ

殿は好都合だね。

ソフイイ サツと暖爐の方へさ、も一脚は入るやうに。

ソフイイ (ひとり何か思出したやうに笑ひながら) ほんとに両方とも

消炭だからシユタインも、ウルリヒもさ。毎日喧嘩ばかりして。

ソフイイ 喧嘩とは非道いよ、あれは戯言なんだよ。(と云つて戸を出

たが、又直ぐは入つて来る)。

ソフイイ (妙な身振をしながらソフイイの後に隨いて戸の前まで来て。

戯言だつて? 其處には譯があるんのでさ。一方は燥急だらう、

そして一方は頑固と來てゐるからね。彼の賣買以來といふものは、

森の立樹をすかす、すかさぬが毎日喧嘩の種に成のだ。兎角金満

家といふ者は何でもねえ事に一人極をしてがん張うとするからな。

シユタインは一列おきに木を切倒して了ふと、塲所は廣くなる太

陽の光線はよく達いて生長に好と思つてゐるし。——と云ふのは、

彼の書物獵師のゴットフリードが何か古い本から引ツぱり出して

云ツたんでもあらう。所がウルリヒと忽ち衝突したね。一昨日も

兩人が其事を云ひ争ツて。シユタインは切らなくちやいけないと

云ふ。ウルリヒは切つては不可と云ふ。シユタインは、否、切ら

なくちや不可、ウルリヒは、否、切つては不可。否、併し切らな

くちや不可、否、併し切ッては不可とシユタインは立上ッて、外
套を取ッて、釦もはめあへず、椅子を跳飛ばして行ッちまつた。
俺等は、もう、此度こそは絶交だらうと思ッたが一杯食はされた。
それがツイ一昨日の晩の事だつたに、昨日はもう夜が明けるか明
けぬ時分に煙草を吹しながらやッて来て此家の戸を叩いてる。前
の晩何をしたんだか、これんばかりの様子も見えずによ、それあ
シユタインさ。又一方はと云ふと、もう、はあ、物の十四五分も
待ッてをッて「さ、おはいり」と其の白い鬚の下から呻り出す、それ
あッルリヒさ。で二人仲れだッて森の中へ行く、喧嘩なんぞした
風は少しも見えぬ、こんな事は珍らしくはねえて。夜になると喧
嘩をする、朝は又一緒に山林へ行く。——然様せにやならねえ事
でもあるやうにさ。それから其の子供等には然うちやねえかてえと、

なかなか。ローベルトが家出せうとしたのも五六度はあつた。し
かし後で考へて見ると、又然う意地の悪強い子でもねえから、止
して丁ふのだが、仕様のねえ家族だよ。(斯う言ひながら、アンド
レエスと井ルヘルムが運んで足して行く食卓の前を、じりじりと
後へしさる。食卓はランプの方から奥の方へ向いて並ぶ。
ソフィ、茲に、然う、然う。それから椅子を持ッておいで、二階か
ら。ソフィアも手傳ひするんだらう。
アンドレエスと井ルヘルム去る。

ソフィア (急に出て行きさうな風をしながら) ソフィアも仕事に追は
れておなけりや、手傳ひもしやせうが、木挽共にも用があるし、
樵の種子の事もあれば、食鹽の事もせにやならぬ、どうも仕事で
物事を考へる暇せへありあしねえ。そして彼の爺さんはと云ふと、

「ウルリヒが小言でも云ふ時の顔つきを真似る。」

ソフイ 然うとでは妾はお前の怠惰けて叱られるのは知つた事ぢやないからね。(と云つて自分で二階へ行く。)

「イラア (又緩りと構えて。) さうさ。(指を鼻に當て) だが待て、此度も亦シユタインの方から折れて出るか知ら。もうシユタインはウルリヒの主人になつたといふ譯だがな、しかし預言は出来んて、——でも主人の方に権利はある筈だ、何故つて、それあ主人だからさ。ふん、時に少し真剣にやツて呉れねえかな。又おきまりの愉快さうな顔にや飽き飽きするせ。」

ソフイ (アンドレエス、ウ非ルヘルムと三人で椅子を運びながら。) 七つ、八つ、九つ、十、(尙一度聲低う數へてみる) よし、さうね。ソイラア 昨日はゴットフリイドの奴め、好い誤面相をしやあがツた

ね、アンドレエスさん。お前また彼奴とおつはじめたぢやねえか、な。

ソフイ 彼の悪い人間とかい(膳立をしながら)。

アンドレエス あんな奴と、温良しく交際ふものがあるもんですか。

ソフイ 過ぎた事は、仕方もないが、以後はよく注意しなけりやい

けませんよ。

ソイラア 全くだ、彼奴は手の先から足の先まで少しも取所のない人

間だからね。

アンドレエス 僕はあるな奴、ちツとも怖くない。

ソフイ あの非ルヘルムや、お前、お庭に行ツてね、草花を少し取つておいで、少し大きなのをね、玻璃に生けて見ばえのするやうなやつをさ。——もうシユタイン様達もお見えになるだらう、番頭の

オラアさんも一緒に、

ソイラア 彼の獨身者が來るとな。

ソフイイ 見ておいで、アンドレエスや、親戚の非ルケンス様はまだ
お來でにならないか知ら。

アンドレエス、非ルヘルム去る。

ソイラア あの非ルケンスも來るのかね？

ソフイイ (稍聲高に) 非ルケンスさんもだツて？ 自分の姪が許嫁を

するのに、來なさらぬといふ事があるものかね。

ソイラア ふむ、御尤千萬ぢや。御金があるからね、あの非ルケンス

様はな。此の界限の百姓様だ。假も以前はワイラア様であつた

せ、金貨の奴等めが假の珈琲店を閉ぢて了つた迄はさ。その時、

奴等が假の「様」といふ字は其の戸の内に封じ込んで了ひをつた。だ

から今でも彼所にやらやんと挟まつてゐらあな。今は簡略にたッ

『ワイラア』となつたんだが、結句手軽で便利さね。だから、それ『ワ

イラアが手傳ふんだらう』とか、『ワイラアが其處に居るからだ』とか、

云はれるのさ。けれども、時々は小癪にも觸るさ、が、それも自

分丈け愚痴をこぼして、自分だけ慰めてゐるんだから、罪はねえ

よ。おや、花嫁御寮がやつてござつた。

マイリ登場、ソフイイと一緒に膳立をする。

ソイラア まあ栗鼠みたいに敏捷いなあ。

ソフイイ ワイラアがお前に御世辭を云つてるのよ、彼の人は彼様な

變挺な人だからね。

ソイラア 然様さ。構ふもんか、上品だらうと下品だらうと、女ソ子

てえものは、撫でさすられてると思つてせへ居りや満足してゐる

もんさ。小兒どもが猫の兒を撫でまはすやうなもんでね、手荒にやつても柔らかにやつても、矢張喉を鳴らすにあ差支へはねえと見えるて。

マリイ 猫にくらべなさるも矢張りお世辭でせうか。

ロイラア そら、其様に喉を鳴らすのも、矢張り、撫でさすられてる

と思つてるからさ、ね。

マリイ (窓から眺めて) 見えますよ、お母さん。

ソフイイ ローベルトさんかい？

ソイラア どうれ、そんなら儼も木挽共の所へ行くとしやう、でない

と又、彼の爺さんが、がみがみ云ふ(退場)。

ソフイイ (後より) お前、席に着かなけりや、お前のお膳は仕舞つて

おくからね。——仕様のない人だよ、もう眞面目な人にはなれやし

ない、それと云ふも昔は有富に暮してゐた人だから、お父さんも、

萬事大目に見てゐなさるのさ、それに、仲間同志ではあつたしね。

又彼のゴットフリードだつて同じ仲間であつたけれど、財産は皆

飲み倒して、とうとうシュタイン様所の厄介になつたんだから。

(食卓の上を見まはしながら) 此の上座に男殿と、その側がお父さん、

それから次に、彼の正直な和尚様と。ほんとに彼の方が居てくだ

さらなかつたら、ローベルトさんは長く家出して了つたかもしれ

ぬ。

マリイ お母さん、あの時ローベルトさんは非道かつたわね、ほんと

に亂暴でしたわ、——

ソフイイ さうさね。彼の時は和尚さんや私共も辛との事で止めた位

さ。(も一度着席の名前を云つてみる) それから爰がメラアさん、彼

處がお前の名付親の井ルケンスさん。それから爰が妾、其處がお前とロイベルトさん。彼處の端にアンドレエスと井ルヘルム。月日の経つのは速いものねえ。妾の許嫁の時も思ひ出されるよ。でも今日のお前のやうには幸福ではなかつたのよ。

マリイ お母さん、お嫁にならうといふ娘は、誰でも妾のやうな心持のするものでせうか？

ソフイイ お前のやうに、然様嬉しい事のあるものは、少なからうよ。妾の心持は、嬉しいといふのでせうか？ 妾には、何だか、

重荷のやうな氣がしますのねえ。何だか——
ソフイイ 當然さ。癖のかゝつた草花のやうなものですもの。頭は垂

れてゐるけれど、些とも重荷ではありませんよ。
マリイ でもね、お父さんに乗て、行くのが、どうも妾には悪い事の

やうで、——ロイベルトさんの爲とは云ひながら。

ソフイイ 聖書にも云つてある通り、女といふものは両親をすて、夫に侍くべきものだとき。——妾の時は又、お前とは違つた心持がしたのです。お前のお父さんは立派な男でね、さう若くはなかつたが身長は高し、姿勢はよし、髯も其頃は真黒でね、こんな人を良人に持つたら嬉しいだらうと、誰でも思つて、垣間見たりなんかしたのもあつたとき。それは妾は知つてますよ。お父さんは妾に對して餘り嚴格で、萬事嚴密になつたのさ、娛樂なんて事は何一つなすつた事はないから、容易な事でお氣に入れる事ではなかつたよ。けれどもね、生活の心配は妾は少しもしませんでした。もし、お父さんが妾に苛酷お當りなすつたとでも今言はうものなら、それこそ妾は虚を吐くのよ、一體頑固な方ではあるけれど、

それは又遠ふからね。

マリイ。ではお母さんは何も澤山にはお望みはなかつたのでせう？

何にも？

ソフイ。それはお前、神様が、娘の願を一々叶へて下さつた日には仕様があるまいぢやないか、娘の心といふものは、何だか自分ですさへ知らぬ事を、強請るものだからね。それはさうと、あそこへ、ロートベルトさんが来るよ。嬉しい風をして居やうぢやないか、また例の様に考込まれると不可いから。

第二場

ロートベルト登場。前場の二人。

ロートベルト。お母さん。お早うございます。マリイさん、お早う。

ソフイ。お早う、ロートベルトさん。

ロートベルト。ア、お母さんの御機嫌好いの見ると、僕はどんなに嬉しいでせう。でも、マリイさん、貴女は何故そんなにぶさいであるのです？ 僕は非常に嬉しくて嬉し過ぎる位ですよ。朝の内、僕は森の中に居ました。藪は露で眩い程さらさら光つてる中を、僕は押しわけてはいつて行くと、濡れた枝が、かつかとほてる頬片を弾く、そして草の中にどツかと座つたのです、それでも居堪らなくなつて、もう嬉しくつて嬉しくつて、泣くより外にどうする事も出来なかつたんです。——それなのに、貴女は、平素は鹿のやうに大へん元氣でゐながら、今日は何故悲しいんでせう？ え？ ソフイ。此の娘も嬉しがつて居ますよ、ロートベルトさん、貴方此娘の幼い時から、よく知つてるぢやありませんか。——人が陽氣にな

る時は、いつも静かにしてゐる氣性なんですもの。

マリイ 否、ね、ローベルトさん、妾は悲しくはありませんの、たいね、何だか、しいーんとして嚴なやうでね、朝からもう然うなんですわ、歩いてても、立止つても、全然寺院にでも居るやうな氣持がしますの。そしてね、――

ローベルト そして？

マリイ そしてね、妾の生涯が、今すぐ足下から落ち込んで、遠く遠く沈んで了つて、そして、新しい生が起つて來るやうです、すつかり新しい生なんですよ、――悪く思つてはいけませんよ、ローベルトさん、――それが變な氣がしましてね、何だか、斯う、心配のやうで。――

ローベルト 新しい生ですつて？

全く新しい生だつて云ふのですか？

それは矢張古い生なんですよ、たいそれが美しくなるのです。僕等は依然古い木の下に坐つてゐるので、たい其の木に花が咲くのです。

マリイ でも、妾はお父さんを棄てねばならぬのですもの？ お母さんも。これ迄の物事は皆過ぎ去つて行くのが、妾には見えるけれど、今後の事は些も見えないのですもの、古いのは捨てなければならぬのに、新しい所には未だとゞきませぬから、――

ローベルト お父さんを捨てるんですつて？ 我々は皆一緒に今迄通りぢやありませんか？ その爲め僕の親父が繁葉森の山林を買つたんぢやありませんか。

ソフイ 此の春は一體が何故とはなしに心配なのですよ、けれども、日に増し幸福になつて行く事を、誰でも知つてゐますから、其の

取越苦勞をしてゐるといふのでせう。妾の願つてゐる通り、皆出
 来るに違ひはありません。——とより外、何と考へられませう。充
 つれば缺くるとやら申しますから、私どもの幸福も、焼肉を焦し
 過ぎるとか、皿でも一枚破すとかして、其の充ちて缺けた方にし
 度いのが當然ですわね。幸福といふものは、御日様のやうなもの
 で、懐むには少しは蔭がなくてはなりませんからね。あ、それは
 然うと、ほんに臺所に其の蔭が出来てはゐないか知ら、見て來な
 くちや。(去る)。

マリー (ローベルトと向ひあつて立つたまま、暫く黙つてゐたが) どう
 かなすつたの？ ローベルトさん。

ローベルト 僕？ 否、何も別に——
 マリー 貴方まだ御父さんに對して怒つてはゐなくつて？ 彼の方は

良いお方ですよ。

ローベルト 僕の親父が良い人ですつて？ 親父から可愛がられるのは、
 甚く叱られるより辛いんですよ。親父の怒るのは、たい亂暴する
 ばかりだけれど、其の慈愛は一も二もなく人を屈服させて了ふの
 です。怒つた時は僕も怒つてかへすから可いんですよ。可愛
 がられると何様もしやうがない。

マリー 貴方は家出しやうとなさつたのね、悪いお方ね、妾ども皆す
 て了つてさ。

ローベルト それは、爲やうとはしましたけれど、併し矢張りしてゐ
 るぢやありませんか。彼の時は實に困りました、何事にも迷つて
 ね、貴女の事も、また僕の身の事に就いてもね。しかし今では、
 もう皆過ぎ去つて了つた事です。少しは蔭がなくちや不可知ら

ぬが、僕のやうに蔭があり過ぎても閉口です。こゝはどうも蒸し暑いから、樂隊の所へ行きます。面白いのをやらせませう。(二人去らんとする)

第三場

山守ウルリヒ、其妻ソフイ登場。及び前場の二人。
マリイ (父を見るや否や、ローベルトを離れて父に抱きつく)。

ウルリヒ エエまた此奴が——(と拂ひのけるやうにしながら)雨後の御
天氣で、蛇が五月蠅く集つて来るわい。ローベルトさんに種々な
くだらない事を喋つたのであらう、此の女子どもは。仕様のない
奴だ。(マリイを押しつけて)僕はローベルトさんに少々話がある、
貴方を探してゐたのです、シユタイン様。

ローベルト エ、私の事をシユタイン様? 何故、もう、ローベルトと
か、お前とか呼んでは下さらぬのです?

ウルリヒ 何等を呼ぶにも、それぞれ丁と時があります。此の女等が
去せて了はなくちや、——

ソフイ 去せますともさ、此の狼爺め。勝手に何んなりと話すが可
い。

ウルリヒ 然うさ。はやく去せたら可いに。

ローベルト (母と娘を戸口まで伴れて)悪く思つては不可ませんよ、

ね、お母さん。

ソフイ 怒るまいと思つても、怒らずに居られるもんですか、ほん
とに。

ウルリヒ 戸を閉めていけ、可いか。

ソフィイ 諾つてる、諾つてる。
ウルリヒ ほんとに、誰が主人だと思つてやがる、此の女ちよどもは。

第四場

ウルリヒとローベルト二人。

ウルリヒ (二人限になると、一寸きまり悪くなつて、室内をあちこちと少し歩み出す)。

ローベルト で、お話は？

ウルリヒ (汗を拭いて) まあ、お掛けなさい、シュタイン様。

ローベルト たいへん御準備が、

ウルリヒ (膳立てした卓子の前面の端の椅子を指す)。

ローベルト (腰をかける)。

ウルリヒ (書物臺から聖書を取り、ローベルトと向合に腰をかけ、眼鏡をかけ頁を開き、咳拂ひをし)。

サロモンの格言、第三十一章、

第十節、貞操ある婦人を得たる者は幸福なり、それは價尊き眞珠よ

りも尊ければなり。その夫の心は、その妻を信する事を得、食に

乏しき事なかるべし。妻は夫に愛を捧げ、その夫の一生涯、決して

て惱みとなる事をなさず。(暫くして、其處に腰掛けたままで、窓

から外へ怒鳴る) 非ルヘルム、其處で何を見てゐる？

「さて、それから次に第卅節。あの、黄楊を悉皆移植へておくんだ。」愛

らしき事美しき事は云ふに足らず、上帝を畏敬する婦人こそ賞む

べきなれ。ローベルト。

ローベルト (愕いて) ウルリヒ、御父さん、

ウルリヒ また、シラハの第何章、何節。——シュタイン様。

ローベルト また、様づけか？

ウヰリヒ 否、も一度呼捨に言はねばならぬ。さうでなくては、心の底から打明けては言へない。——ローベルト。

ローベルト 貴方、大へん殿かに。

ウヰリヒ 殿かだど？　む、然うたらう。これは然うでなくてはならぬ。我々は異教徒ぢやない。(姿勢を正して)君は神に盟つたらう？　こりや、ローベルト、——

ローベルト それはもう、——

ウヰリヒ お前は儂を然様見つめるがの、——お前は結婚をする氣か？

む？　ローベルト、——

ローベルト (愕いて立上り) 貴上はもう御承知のくせに、——

ウヰリヒ 無論。だが、何事にも云ひ出しの緒がなくてはならぬ。

ま、お掛け。儂はな、君に一度言つて置かなきやならぬ事がある。平常は些とも儂は踏踏する事はないのだが、今日はね、言ッて聞

かせうとするのに、何だが、斯う、今、自分が樂うとする兎の直ぐ後に、正装の和尚様でも、伴いて立つてゐるやうな氣がしてな。

(あ、わかつたと云ふ風に) ヲム、然うだ、斯う言へば可いんぢや。

今爰に鹿が一頭、竜堂の森から出て來たと假定する。可いか、ロ

ーベルト。氣をつけなさい。茲の此の肉叉が鹿だよ、可いかね。

この鹽壺、これが君だ。そして風が此の皿の方から吹いてゐる。

此の場合に何うする？　君は、鹿に忍び寄るには？　え？　(ロー

ベルトの考へを助ける顔付で) え、おい、そして？　君は？

ローベルト 其時は、——

ウヰリヒ (うながす顔つきで) 其時は、——(と又様子をする)。

ローベルト 是非共、風を反らさねばなりません。

ウリヒ 風を反らさねばならぬ。む、然うだ、その通りだ。で、それに就いて儂の心がよめたかね。君は風を鹿に反らさなくてはならぬ。其所だて。いゝか。だから儂は君に言つて置かうといふのぢや。(嚴肅に)君は風を鹿に反らさなくてはならぬぞ、いいか。(立ち上り)そしてね、——マリイを可愛がつてくれ給へ、ローベルト君、ね、儂のマリイを。(と行かうとする)。

ローベルト でも其れはマリイ様の事に如何關係があるのですか？
ウリヒ は、はあ、まだ君は儂の言つた事が了解らんぢやな。君は、今鹿に對して行る事を、鹿に覺られては不可だらう、ね、可いか、そして女なら尙更の事だよ。君は一體女にちやほやし過ぎていかぬ。小供といふものは、其の両親が、どんなに可愛がつて

あるか、それを知つてはいけぬ、決して、知つてはいけぬ、ところが女となると、尙更いけぬ。女といふものは、小供の出来上つたのに過ぎぬ、たいするいはかりだ。小供等が、はやもう充分にするいのに、それに一層輪をかけてするいのだから堪らない、外に長所と言つてはない。

お掛け、ローベルト。儂は君にも少し話して置かなければならぬ。(二人は食卓の端に着いて、見物の方へ向いて)儂のマリイが四歳の時、さうさね、此の位より高うはなかつたらう、(と手で身長を示して)——平常より少し後、家に歸つてね、マリイはと聞くと、室にでせうと誰か云つた、家の前にと答へたものもあつた、すぐ歸るだらうとも誰か云つた、ところが何うだ、夕方になる、晩になる、——けれどもマリイは歸らぬ。儂は尋ねに出て行つた。

庭の内、村境の藪の中、寂寞路の巖の間、山林の中と、どこを探してもマリイは居ない。その間に、女房は、又、君の邸、また、村中を探し歩いた。それでもマリイは居らぬ。万一誘拐されたのぢやないかと思つた、實に彼女は、臘細工の人形みたやうに、可愛らしかつたからね。儂は終夜徹睡ともしない。マリイは儂の生命なのぢや。翌朝、儂は村中に頼んだが、誰一人親切に心配してくれぬ者はなかつた、と云ふのは、彼は皆から大層可愛がられてゐたからね。儂はせめて、死骸なりと探して葬らうと思つた。彼の、怖ろしい寂寞路ね、君知つてゐるだらう、樅の茂つた所さ、溪流の上に古い小徑があつて、漏天橋が架つてね、あの下の草原さね、彼の森の中を、儂は残る隈なく馳けまはつたが、森の真中程にまた、小さな草原がある、そこに、何だか赤い、又白いもの

を見つけた。何といふ嬉しい事だつたらう、それがマリイだつた。死んでるでもなければ、病み疲れて居るでもない、緑い草の中に活潑して眠つて、紅の頬は花のやうに美しい可愛い。ローベルド、——だがね(四方を見まはし、聲低う)若し、彼が聞いてゐないか知ら。(ローベルドに近く寄り、うっかり聲高に云つたのに氣付て愈低う)オッお前はマリイか、と言ふと、輝く眼をこすりながら、ア、さうです、と答へた。お前はまあよく生きてゐてくれたな、飢と心配で死んで了はなかつたが、半日と一夜森の中になつた一人、此様怖ろしい森の中になつた一人、まあ、よくお前は、と言つた。さあお出で、早く家に歸へらう、御母さんは心配して死ぬかもしれぬと云ふと、お父さん、まあ御待ちなさいと云ふのだ、何故と聞くと、先刻の童子が今に亦来るから、一緒に伴れて

つて下さいな、お父さんだつて可愛い童子です、と斯う云ふのよ。全體それは何だと聞くと、妾が先刻黄色い蝶々を追ひまはして来ますとね、急に一人ぼつちとなつて、森の中に居るのです。お父さんお母さんと泣いて呼ばうとしたら、彼の童子が来て、さうして、毒を摘つてくれて、楽しく遊んでゐたのよ。何、先刻だとも？もう一晩明けたぢやないかと言ふけれど、彼は然様は思はんでね、二人で探したけれど、素より其様小供の居らう筈がない。當世の人間はな、此様な事を信用するものはないが、儂はな、儂一人腹の中合點してゐる事があるのぢや。解つたかい、ロリベルト。口外してはいかんよ。儂は之を口に出すと、何だか、神聖を汚したやうな氣がするよ。さア、徐と其の手を出しなさい、よろしい、ロリベルト。——彼が聞きはすまいな。(そつと戸口の方へ行つて見

やる)

マリイ (外から) 何か御用ですか？ 御父さん。

ウリロ (ロリベルトを顧みて、そつと笑つたが、又外へ向つて荒つぽく) 何も用はない。万一にも愛へ来ちやならんぞ。——(と云つて、又舊の座について聲低う) 可いか、斯ういふ風にしないではいけないよ。君は一體、女どもにちやほやし過る。彼女はね(と一層低聲に)、あんな娘を持つた親はね、自慢をしても可いのだよ。彼女は神の御心通りの女になる、それを儂は信ずる。ソフイも善い女ぢや、可いか、君が口外せぬ事を知つてゐるから、斯う言ふのぢや、彼女には何も知らせちやならぬ。でないと、すべての骨折は無駄になる。彼女をこれ迄にするには随分骨が折れたのぢやて、君はね、儂の愛娘を代なしにしてはなりませんぞ、彼娘を立派に

育てあげるまでに、儂は大へん苦勞をした。

ローベルト 若しや、代なしに爲はせんかと、貴方は思つてゐなさんですか、——しかし、僕は貴方の仰る事がわかりませんよ。

ウリヒ 何？ 矢張りわからん？ 君はわかるまいと勉めてるのぢや、以ての外のことだ。女どもにちやほやするといふ事は、な、儂のためと思つて止してくれ、ね、可いか。若し、君が諾かすに行るなら、彼は四週間と経たぬ内に、君を馬鹿にしてしまふ。女といふものは、いつでも主人振りたがるものでね、その爲る事は一切、無識に、もはや、然様なつてをるんぢや。それでもし女どもが然様なつたが最後、奴等一生の不幸となるのぢや。儂は其例は澤山知つてゐる。儂は鳥渡戸口を窺いただけでも、其家の亭主の價値を知る事が出来る。家畜を見ただけでもわかる、犬や猫が

良く嫉けてない家は、其家の童子だつて知れてゐる、女どもの事は尙更だ。え、おい、どうだね？ 儂の女房はな、此所に（と自分の胸を指して）何を思つてゐるか、知つては居らぬ。若し、それを知らうもんなら、それこそお丁ひだよ。女といふものは、天使のやうにしてゐなくちやならん、男子は熊のやうに荒らつぽぐで良い殊に我々獵友間では、一層の事ぢや。此の上髯も、この青外套も、それでこそ立派な名譽の標なんぢや。

ローベルト でも、それは、どうも、——
ウリヒ （燥つて）否、ローベルト、決して決して不可。女房が夫を

操るか、さなくば夫が女房をあやつるか此の二つの外にはない。
女房に仕向け方の手本は、何より儂ぢや。儂の女房は、人の難儀を見て居ることの出来ない性質だから、大勢の貧乏人がやつ

て来るが、儂が一度それを、褒めでもしやうものなら、それこそ
 付上つて、何様なるか分りやしない。だから儂は小言を云つて、
 怒鳴つておくが、奴等が自由にされるやうに、ちやんと座を避け
 て、濟んだ頃を見はかつて、又ふいと歸つて来て怒鳴るのさする
 とね、世間では、儂は貧乏人に對して悪魔のやうな奴で、女房と
 娘は天使のやうだと云つてゐる。そして、それを儂に聞えよがし
 に言ふ、儂は聞いても、聞かぬ振りをして、腹では笑ひながら、
 矢張り荒つぼくやるのさ。——や、お客が来た様だ。ローベルト、
 儂の女房と娘のマリイぢや、——儂が若しもね、ひよつと——可い
 か、ローベルト。手を出しなさい。神様も御覽なされ。(眼を拭い
 て自ら吐り)馬鹿なつ。——女どもに氣付かれては不可い、そして女
 どもを操るのだぞ、さう爲なくちやならんよ。——(心弱さを隠すた

めに彼方に向いたが、嚴めしい顔つきを装ひながら、それを強ふ
 る事も得せぬ。戸口から入つて来たのは)

第五場

シユタイン、ヌラア、井ルケンス、マリイ、ソフ
 イ。及び前場の二人。(皆、ウルリヒに挨拶する)。

シユタイン 何を然様急込んでゐるのだ、老人。また此の悴に何とか言
 つたな。

ウルリヒ 然うよ。此の女の事で、若い者に説諭したのぢや。

シユタイン 女人陛下に對する大反逆かい。貴女はそれを辛抱なさるか

？ 姑さん。

ウルリヒ (妻の口吻で) 辛抱もしたり、しなかつたりで御座いますわ、

——忙しくつて、何事も世話を焼かねばなりませんものですから。
 ——そしてね、女房が夫を尻に敷く事が、どうも下手だなんぞと、
 他から嘴を入れる奴もあつてね。時に、トランプを持つておいで。
 シュタインに、今朝の食事前の復讐をしてやらう。
 シュタインの復讐をしてやらうかな。

(ウルリヒとシュタインは右側で向合ひに腰掛け、トランプを行る)。
 ソフイ (一寸トランプの方を見たが、彼方へ行きながら、ローベル
 トに) 今日も亦山を透す、透さぬの話にならねば可いが。

メラア (左の方に居る非ルケンスの傍に行つて、マリイを指しながら
 話す。行つたり來たりしてゐるソフイとローベルトにマリイは
 話をしてゐる) 立派な花嫁ですね。
 非ルケンス それに家も貧乏ぢやなしね、番頭さん。

メラア (丁寧に) それはもう、貴方が彼のお母さんの叔父様であらつ
 しゃる事は、誰知らぬものもありませんよ。

非ルケンス (悦んで) はあ。
 メラア をして、又シュタイン親子商會と御縁組をなさるのは、貴方
 にとつても亦名譽でせうがらね。

非ルケンス (落付いて) どう致しまして。
 メラア (苛つて) 貴方、此シュタイン親子商會ですよ。私は二十年も
 奉公を致して居りますがね、私にはこれは名譽でも誇りでもあり
 ますよ。此の商會は私の妻子なんですよ。

非ルケンス まあ然うでせうよ。
 メラア シュタイン親子と親戚になるといふ事は、獨乙第一流の門閥
 でも、名譽とする所だと私は考へてゐますがね。

非ルケンス 然うでせうよ。(ロリベルトとマリイの方へ行く)。

メラア (二人非常に立腹)。(ヤツぱり傲慢な百姓奴だ。シユタイン親子があんな娘に長所があるやうに、思つてなけりやならねえと考へてやがる。奴が七萬圓足らずの財産も、三つに分けなくちやならぬ上、奴が死んでからでなけりや、受取れもしねえ。彼の十二萬圓の、レエライン商會の一人娘はどうだ、商賣のやり口が比較にやならねえ、加之、今日と云ふ今日直ぐでも、受取れる財産なんだ。不釣合の婚禮に賛成が出来るもんか。だが仕方がない。まあ(戸外には旋律の響き)舞踏でもやつて、氣まぐれをしてやれ。あの、奥様、一回戸外で如何なもので御座いませう。(獨身者の例の妙な身振をする)。

シユタイン 好い牌が來んか。

ソフイ 未だ時間は可いでせうか。

非ルケンス 此の非ルケンスも、仲間外れをするんぢやないよ。(衣囊に手を入れて)儂が樂手たちに錢を拂つとかう。時に、可いかね? 花聲殿。

(メラアはソフイと、非ルケンスはマリイと戸外へ行く。ローベルト隨いて行く)。

第六場

シユタイン。ウルリヒ。

シユタイン (牌を投げ出し)。切牌はたつた一個しか有りはしない。

ウルリヒ (吹聴するやうに)。スベエドの二十だぞ。

シユタイン (再び手に取つて。疝癪を起しながら)。たつた二十か、四十

ぢやないのか。あ、スベエドの縁で思ひ出した、木をすかす事は考へてみたか。

ウルリヒ 奴はどうも、——(二人トランプをついけながら)。

シユタイン 何奴だい？

ウルリヒ 穿り出しやがつた奴よ。

シユタイン 乃公の事か？

ウルリヒ 手前の書物獵師さ。

シユタイン (愈苛り、聲に力を入れて) 乃公の書物獵師？

ウルリヒ (愈落着き拂つて、輕快に) まあ、乃公のだつて云つても可

いや。

シユタイン 手前は何日も彼奴の事ばかり云ふよ。

ウルリヒ では其の話はもう止さうよ。

シユタイン 乃公から言ひ出した様に云つてら、何時も手前が持ち出す

ぢやないか。彼奴の事なら、手前云はないで置く事はないんだ、

餅みたいに齒にでも、くつつ着いてると見えるて。

ウルリヒ (落着き拂つて) 然うとも、然うとも今だつて然うぢや。

シユタイン 手前は乃公を怒らせぬて約束したぢやないか？

ウルリヒ 馬鹿め、手前が勝手に怒つてるだけだ。

シユタイン 乃公が勝手に？——出し損つたのに何故切るか？

ウルリヒ 出し損ひは行き損ひよ。

シユタイン (牌を投げ出して) では勝手にしろい。(と飛びあがる)。

ウルリヒ 配るぞ。(緩りと混せて配る)。

シユタイン (歩み出して) もう手前とはしないぞ。

ウルリヒ (構はず平氣で) 乃公が配る番だぞ。

シユタイン (また腰をおろして)。頑固爺めが。
 ウルリヒ さ、直ぐはじめろ。
 シユタイン (牌を取り上げ、やはり烈しく)。折れて出ぬのか。手前が悪
 いなあ分明りきつてゐてもか。

第七場

メラアはソフイを伴れて登場。又、非ルケンス。
 戸外にはワルツの曲する。及び前場の人物。

ソフイ もうお終と思つたに、――
 ウルリヒ も二度跳ねて来い。
 ソフイ 貴方一人くづくしてるから、いつまでも――
 ウルリヒ 和尚様も未だなのだらう。

ソフイ 朝の御飯には待たない様にと、然う御自分がお言いですも
 の。正十一時には婚約式にお見えになる筈なのですよ。

ウルリヒ では、お前達だけ席に着いて、前へ食べかけるが可いや。
 シユタイン 何卒御遠慮なく、――
 ウルリヒ 儂等は此處に腰かけてもよし、其處でも構はぬ。――をら、
 一度にスペエドの四十だぞ。(續けてトランプを演つてゐる)。

シユタイン いやはや。
 ウルリヒ (勝ち誇りて)。書物獵師は何うした、最早彼奴の事を思ひ出
 さぬのか。透す事は何うしたい。――彼奴はね、――
 シユタイン (辛抱しながら)。今に見とれ、――
 ウルリヒ (だんく)と早口で。彼奴は、馬鹿だぞ。女王は切れはせぬ
 ぞ。

シユタイン 氣を付けて物を云へ、乃公等二人だけゐるんぢやないぞ。
ウルリヒ (遊方に夢中で) ぞら切牌だ、——ぞら又だぞ、——ぞら透すん

だぞ。

シユタイン 然うぢや、それが可い。乃公が思ひ付いた事なんぢや。

ウルリヒ ぞら又切牌ぢや。

シユタイン 乃公が斯うしやうと思ひさへすれば、——(腹の蟲を抑へてゐ

る)。

ウルリヒ それなら何様しやうと云ふんだ。(勝ち誇りて牌を皆集めに

かゝる)。

シユタイン (疝癪を一生懸命に抑へて) 乃公が勝なうとさへ思やあ、——

乃公が爲やうとさへ思やあ、——

ウルリヒ 成り行く通りさ。

シユタイン さうすれば直ぐすかすぞ。

ウルリヒ すかさぬぞ。

シユタイン すかして見せるんだ。そしてすかされるんだ。

ウルリヒ されないんだ。

シユタイン 山守君。

ウルリヒ (笑ひながら) シユタイン君。

シユタイン よし、よし。

ウルリヒ (平氣の平左で) その通りさ。

シユタイン 一言ももう言ふ必要はない。

ウルリヒ 一本もすかす必要はない。

シユタイン (立ちあがつて) 抗辯も嘲弄も役に立たぬ。眞平御免だ、乃

公はもう眞平御免だ。乃公は紫葉ヶ森の主人だ。

ウルリヒ 乃公はまた繁葉ケ森の山守だ。
シユタイン (益疔癩を起してくる。人前ではあり、辛抱へねばならぬ、

その苦しさ、他ではそれは知つてゐる。ウルリヒは平常の通り平
氣で相對らつてゐる。ソフイイは心配をしはじめて、二人を見較
べてゐる。非ルケンスは様子は少しも異ならぬ。メラアは其の主
人の肩を持つて身構へしてゐる。トランプは愈烈しくなる。君は
乃公の家來だ、乃公は命令する、すかさねばならぬ。でなければ、
君は今日迄の山守だ。すかさなくちやならぬのだ。

ウルリヒ 疔癩爺めが。

シユタイン 従かぬなら山守も今日迄だぞ。

ウルリヒ 馬鹿な奴め。

シユタイン そして書物獵師が君の地位を占めるんだ。

ウルリヒ それも結構。お目出度う。

シユタイン (釘をつめ) すかさぬのだ。

ウルリヒ すかさぬのだ。

ソフイイ (兩人の間に入つて) あま、貴方がたは――

シユタイン 甚だ御氣の毒ではありますが、――メラア君、お暇するんだ。

(退場)

メラア ひやひや、流石シユタイン父子のやり方だ。それなら私は何
事でも仰せのままに。(と續いて去る)。

ウルリヒ 配るぞ。――(牌を混ぜながら見て) や、行つちまつたな、一時
間とは温順しく座つてゐる事が出来ぬのだからな、ほんとに疔癩爺
だ。――

第八場

ウルリヒは其座に平氣で腰をかけ。妻ソフイイは其傍に。井ルケンスは山守の方へ行く。

ソフイイ　まあ、どんな事になるのでせう。

井ルケンス　お前様は、シユタインには譲らなくちやならぬ筈だ。

ウルリヒ　彼の疔癩爺が譲る筈なのだよ。

ソフイイ　妾は谷底へでも陥たやうな氣がしますのよ。時も時、婚約

式の日になるね。

井ルケンス　つまらん僅ばかりの樹のために、お前様はああまで云はな

くつてもいゝ事ぢやないか。

ウルリヒ　つまらん樹だつて、惨酷い事を言ふね。儂の山には一本

だつてつまらん樹はありやしないよ。おい、其處な奴さん、くづ

泣事列べて呉れるなよ。

井ルケンス　でも、主人たるシユタインは――

ウルリヒ　まだ遠くは行くまいよ。怒つて了や、直ぐ第一番に仲直り

に来る彼奴さ、――彼は儂よりは正直だからね。

井ルケンス　でも、――

ウルリヒ　お前さんは何日も「でも」ばかり云ふね。彼は何日でも斯うい

ふ性質ですよ、二十年このかた、――

井ルケンス　でも、今日では主人だからな。

ウルリヒ　主人であらうが、なからうが、すかす事はなりませんよ。

井ルケンス　でも、お前様は職業を失つてしまふぢやないか。

ウルリヒ　彼の書物獵師にかね？　くだらぬ事を言ふね。シユタイン

が彼奴で辛抱してゐる事が出来るかい？ シュタインは儂をよく知
つてるよ、儂が儂を賞める要もないがね、何處にだつて儂の此の
山のやうな山が又とあるだらうか。そら、もうシュタインはやつ
て來るところだ。お掛けなさいよ。で、彼がはいつて來たら、決
してもう先刻のやうな顔つきはしてゐないからね。

第九場

メラア急ぎ入り來る。以前の人々。最後にアンドレ
エス。

ウルリヒ (仰ぎ見もせず)。(おい、配るぞ、(と、トランプを取る。メ

ラアと氣付いて)君はメラア君だね。

メラア (嚴肅に)。(その通りです。

ウルリヒ 凭け給へ。疝癪爺の疝癪は鎮靜つたかね。何故彼は來ない

のだ？ 儂がよびに行かう(と行かうとする。)

メラア シュタイン様は、篤と考へたかと、ウルリヒ様に行つて聞い
て來るやうにと命令になりました。

ウルリヒ 考へると云ふと？

メラア 貴方が木をすかさうと思ふやうに。

ウルリヒ 儂はすかさうと思はんやうに。

メラア それは貴方が山守の職を失ふといふもんです。

ウルリヒ それは君が馬鹿者だといふ事を證明するといふもんだ。

メラア (極めて嚴肅に)。(私は、主人アドルフ、フリードリヒ、シュタ
インの委任を有つて來ました、シュタイン父子商會の管理人です。
若し貴方が、主人の命令を奉ずることが否なら、貴方を免職させ、

直ぐにゴットフリードに繁葉ケ森の監督者を任命する委任を有つて来たものです。

五六

ウルリヒ それは君には好い氣持だらう。

メリア 私に關した事ではありません。シュタイン父子商會の事です、私はその委任を光榮とするものです。熟考の爲め、更に五分間の猶豫を與へます。(窓の方へ歩み行く)

ウルリヒ 免職? 僞を免職? 君は全體免職といふ事を知てゐるか?

四十年間忠實に仕へた男をさ? 君は何と云ふ阿呆だらう。若しも僞がシュタインの云ふ通りにでもしやうもんなら、それこそ免職に價する事だ。樹をすかす? 山はね、北と北西に向いて、本を開いて立てた様になつてるよ。

井ルケンス 爰では木の事が話ぢやないんだ。

ウルリヒ 風が吹き込んで来て、何でもかでも倒れて了つたら、どう

だらう。馬鹿なつ。それはシュタインが眞面目で言つてる事ぢやない。苟にも考へてみたら直ぐわかる事ぢやないか。

井ルケンス だから僞は其事を言つてるぢやないか。ほんとにすかす事になる迄にや、まだ幾度も考へてみるに違ひない。だからお前も其點を思はなくちや不可よ、主人のシュタイン様は、ただ木を切る切らぬといふ事ばかり思つてゐるのぢやない、其の主人と云ふ躰裁を保たうと言ふのさ。彼の人が主人たる以上は、彼の人に正当な權利はあるんだからね。

ウルリヒ ところか、彼は正當でないのぢや、僞は不正には賛成はせぬ。四十年以來、僞は僞に信頼されてゐる事を等閑にした事はない、僞はね。

五七

井ルケンヌ ふむ、だから僕は思ふのだ、四十年も忠實にお前様は樹木の世話をしたのだから、一度は又妻子や自分の事を考へて見てもよからうぢやないか。

ウルリヒ シュタイン家の一萬圓近くの損になると云ふ事を、お前様御存じか？ 僕が「よからう」と一言で、それを爲せて可いだらうか。さうしたら、後から、誰か又山守になつて、ウルリヒは「よからう」と云つたといふだらう。十五年の内には損が来る、すると萬事がわかつて来る。そして、

井ルケンヌ ふむ、それは何時でも何様にか、また、
ウルリヒ 恐ろしい風が、魏斯蕪廳の方から吹いて來たら、ま、何様だらう。お前様は勝手な事を云ふがよからう。
ソフイ (恐れ氣遣うて) ても、まあ、何となる事だらう。

ウルリヒ 吾々は正しい人間ぢや、何時になつても正しい人間なのぢや。

井ルケンヌ ふむ、こゝでは正しいの正しくないのが問題ではないよ。

ウルリヒ では何うしろと云ふんだ？ 忌々しい、讓歩しろといふのか？ それなら然うしたまへ。お前達は惻巧な人間だよ。そしてこつそりと陰で笑ふのだらう。公明正大な言葉なんかはいらないのだらう、それがお前達百姓の道なんだ。自分の財布にさへ關係しなげりや、打遣つておくのだ、爲すにすむ事なら、何でもね、

井ルケンヌ (満足の體にて) む、さうよ、百姓は、爲すにすむ事なら、手でも足でも動かさへせんよ。それで既う充分正當なんじや、それが百姓の道といふものさ。で、僕はお前さんに言ふがね、百姓

の道といふものは、さう馬鹿にしたものぢない。だからお前さんが百姓の道を守つて行けば、それはお前様の義務を盡すといふもので、一釐でも盡し過ぎるのではない。そして自分のものを自分の爲に、また女房や小供のために使用ふといふもんだ、他人のために費すぢやない、それで可いんだ、結果は同じ事だ。——パンをくれる人を儂等は褒めて歌ふのさ。お前様は家來でこそあれ、旦那ぢやあるまい、自分相應の事はかしてはならぬ。だからお前さんの旦那が命令ける時は、透さなくぢやならないぢやないか。——

ウルリヒ そんな時はすかさぬ様にしなくぢやならぬのぢや。正直正道な人間は追従つかひとは違つてゐる。
 井ルケンス ふむ。ぢやもう言ふまい。結句打遣つておく方が優しだ。
 (彼方へ向く)

ソフイ 貴方は出て行きなされるのぢやありませんか。貴方だけでは、妻どもの頼みにして慰められるのは、ね、叔父さん。家の人も尙考へるでせうから、また彼の人だつて貴方の詞はおろかには聞いてゐませんから。

井ルケンス それは知つてる。
 ソフイ 婚約は何うなるだらう。——マリイの事が心配なこと、和尙様もまだお見えにならないし、叔父さんまで去つておしまひなさるなら、——

アンドレエス (登場)
 井ルケンス ウルリヒ殿は、頑固で迎も爲やうがない。人が何と云つて聞かしたつて、ふむ、道理のわかる人間かい。
 メラア (此時まで、窓から外を眺めてゐたが、自分の時計を一寸見て、

さてウルリヒの方へ、(きつと向き直つて)。ウルリヒ様、さ、最後
の御返答を願ひます。

ウルリヒ 儂が云つた事は先刻の通りぢや。(歩き出し、又立止りて)兎
に角、シュタインは儂を免職する様な事は出来ぬのぢや。もし免
職しやうといふのなら、先以て儂が免職される理由を、儂に知ら
せなくちやならぬ。どんな事があらうとも、決して、決して、彼
が儂を免職するといふ事が出来るもんか。

メラア (きつと構へて)では貴方は命令を聞ぬのですな。明確返答な
さい。命令を聞かぬのですか？

ウルリヒ 君には、これが明確でなけりやあ、他には明確と云ひ様か
ない。儂は邪な人間にならうとは思はぬと云ふのぢや、そして彼
は忠實な人間を免職する事は出来ぬと云ふのぢや。これが明確で

ないかね、きつぱりし過ぎる様だがね。儂は山守ぢや、そして何
時までも山守なんぢや、そして、樹は決してすかさぬのぢや。

此事を君の旦那に云つてくれ、書籍獵師にも云つてくれ、其他誰
なりと、君が言ひ度いと思ふ人に云つたが可からう。

ソフイ 家の人の申す事は、何卒勘辨して下さいな。シュタイン様
も真面目で免職するなぞと仰るのではありますまいよ、貴方は、

何時も御親切にねえ。妾共の世話をして下さるんですからね、
メラア 若し、私なら、奥様、此のユスツス、メラアが主人なら、

貴方のお氣に召す事なら、何を爲ないで置きませう。併し、今日
はシュタイン家の代理人で来たのですから、

ウルリヒ 正當な理由があると云ふなら、許すん行るが、い、い、
こら、女共、貴様は乃公の正直を辱しめてはならんぞ、不正な方

に哀願するなんて、何の事つた。さよなら、メラア君、他に何か用事でもあるのかね。無い？ では他に尙だ儼に言ふ事でもあるかね。

メラア (非常に嚴肅に)。何もありません。山守といふ貴方の職業が此の瞬間に了るといふ事を知らせるだけです。茲に半年分の俸給を置きます。で、成るべく速く、遅くとも三日間に此の所を立退て頂きます。新任の山守が住まねばなりませんから、その山守は今後一人で此の山の事を取扱ふのです。

ウルリヒ (腰を掛けざるを得なかつた)。

ソフイ (アンドレエスを制めてばかりゐたが、戸口の方へ急いで行くので)。アンドレエスや、何處へ行くのか？ 彼の親父が、——

ソフイ また争論をしてはいけないよ。

アンドレエス 放して下さい、お母さん、彼奴の襟首を引摺んで、—— (烈しく振り放して行く)。

ウルリヒ もう可いからよせ、お前は黙つてゐろ、女。(立ちあがり、

さよなら、メラア君。君はお金を置き忘れたぞ。持つて行かなければ、後から投げつけてやる。(窓際に進み行き、口笛を吹く)。

メラア 奥様、私は悲痛をもつて私の此の義務をなすのです。これからゴットフリードへまいります。

ウルリヒ (見送りもせず)。御機嫌よう。

第十場

ウルリヒは窓傍に立つて口笛を吹く。井ルゲンスは

帽子と杖をとる。ソファイは詮方盡きて心配さうに二人の顔を見較べる。メラアは出て行く際に、ローベルトとアンドレエスの駆け込んで来たのにつくわす。マリイはローベルトを和むるために其の腕にすがる。

ローベルト (怒つてはいつて来る)。貴方が折れてくれなきやなりません。

貴方は此の芽出度い今日を滅茶くにしてはなりません。

アンドレエス 君のお父さんに然う云ひ給へ、君のお父さんから喧嘩を

買ったのだと。

メラア 丁度好かつた、貴方に逢ふて、ローベルトさん。直ぐ宅へお

歸りなさい(と去る)。

ローベルト お父さん、どうか折れて下さい、貴方は折れなくちやなり

ませんよ。

カルリヒ (窓傍から向きかへつて) 君はローベルト君か。君は僕に何を要求するんだ。マリイ、お前は彼方へ行きなさい。君の親父が免職しやうといふ男に、君は何を頼むのだ。

ローベルト でも、貴方はなせ一言承知するつて言はなかつたのです？

アンドレエス 僕の父は正直な人間だからさ、君達から不正な人間にされる事はないのだ。(父ウルリヒは黙れと目指す)。

ローベルト アンドレエス、僕は君と話してゐるのぢやないせ。

ウルリヒ 君は君の親父の承知で此處へ来たのか？ だがね、君の親父は僕の地位、僕の名譽を奪はうと云ふのぢやないか、僕の立派な娘まで奪ふことが、出来るもんか。又君がかね？ おい、僕は眞面目で云ふんだよ、解つたか。

ソフイ 貴方はまた、たつた一人残つた友達まで失くしやうとなさるのですか？

ウルリヒ あんなものが友達だと、馬鹿ッ、マリイの名折れた。君は君のすべき事をすればいい、僕が云はなくても知れてゐる筈ぢや。

ローベルト 僕は其れは知つてゐます、貴方こそ貴方のなさるべき事を御存じないので。却つて貴方の小供の幸福を、鳥渡した氣まぐれの犠牲にしやうとなさるのぢやありませんか。御自分の、

ウルリヒ は、は、それはね、君の親父に言ふべき事だ。

ローベルト 御自分の頑固な心の犠牲にしやうために、僕は貴方の約束の言葉を覚えてゐます、マリイさんは又僕の言葉を覚えてゐるでせう、僕は男子です、僕は不正なものにはなりません。

ウルリヒ 君が不正なものになり度くないからといつて、それで僕が

不正なものにならなければならんのか。ウルリヒはシュタイン父子の間を裂いたと、世間に言はせなくちやならんのか。僕のマリイはね。君の家にこつそりはいり込んだと、世間に言はれねばならぬ様な、そんなつまらぬ娘ぢやないよ。ローベルト君、僕が此家の主人ぢや。僕の考へを君は知る方が可い。

ソフイ せめて小供だけでも、希望通りに、

ウルリヒ 馬鹿な。然うして何うなると思ふ？ 後から悔の八千度を數へるより他はないだらう。

ローベルト マリイさん、たとへ此事は何うならうとも、ね、

ウルリヒ マリイが何を考へてゐるかは、僕は知らぬ。しかし萬一、僕の心を知らぬやうな女なら、ローベルトと一緒に出て行くが可いのだ。

マリイ お父さん、ローベルトさんは、正直一徹に考へておいでですの。

ウリヒヒ よろしい、では一緒に出て行け。

ソフイイ 其様に頑固に、まあ、

ローベルト 天地に盟つて、マリイさん、貴女と二人は天の定めです。

ウリヒヒ

(先刻のやうに、ソフイイに)。小供だけなりと希望通りにと

お前は云ふがね、可いかな、若しも、(妻と共に後ろへ向く)。

アンドレエス

(堪へきれず)。よし、マリイ、お前は彼方へお行で、でなければ此奴去せろ、さあ。

ソフイイ

またお前おつばじめるのか、アンドレエス(と左側へ、アンドレエスの方に行く)。

アンドレエス

僕は長く忍耐へてゐた。お母さん、放して下さい。彼奴

の親父は、僕のお父さんに耻をかゝせたんです。おまけに彼奴に、

妹が輕蔑されていゝもんか。

ローベルト

マリイさん、貴方は僕のもので、我々に何か爲やうとい

ふ奴は來て見ろ、その手を放せ。

マリイ

ローベルト様、妾の兄様ですが。

アンドレエス

(脅迫して)。さ、やるならやつて見ろ、

ローベルト

手を放せと云へば、

アンドレエス

貴様は乃公の相手にはならぬ、

ローベルト

公乃のものに、貴様、指の先でもさして見ろ、ウヌ貴様達

がいくら抵抗したつて、

アンドレエス

お父さん、こんな事を吐きますよ。

ウルリヒ (二人の間に入りて)。控へてゐる、小童めら。云ふ事聞かぬ
奴等だのう。

七二

アンドレエス 貴方が云ふ事服させる権利があるなら、権利があるやう
になさい、貴方が爲なけりや、僕が代つてします。

ウルリヒ アンドレエス、彼方へ去つた、がやがや言ふな。

アンドレエス でもお父さん、――

ウルリヒ 貴様亂暴な事するんぢやなからうな。

アンドレエス (壁から小銃を手荒に取る)。

ウルリヒ 貴様何をする?

アンドレエス (齒を喰ひ緊めて)。何もしませぬ。此家では貴方が主人で
すが戸外には主人はありません、戸外では誰でも皆が主人です。
ウルリヒ 乃公の山中は乃公が主人ぢや。

アンドレエス それから一步でも出ると、もう然うぢやありません。

ウルリヒ それは何の事を云つてるのぢや? 返答せい。

アンドレエス 何でもありません、お父さん、それ丈です。戸外で此奴
が知るだけです。貴方が、貴方の名譽を構はぬなら、――マリイの
名譽は僕が監督します、マリイに近付かうとする此奴を、此奴に
用があるんです。

ソフイイ まあ、何といふ言葉だらう。

ローベルト 口吻ばかりだ、嬰兒ならそんなことにも恐がるかしらんが。

アンドレエス 口吻だけで済む事と思つてゐるか、乃公は男子だぞ。

ローベルト 貴様が男なら、口吻ばかりは喋るな、貴様、――

アンドレエス 此處だから貴様は其様口を吐いてるが、――
ウルリヒ こら、アンドレエス。

七三

ローベルト 其處をのけ。

アンドレエス

行せろ。

(同時に言ふ)

ウルリヒ

(亦殆ど同時に、指で烈しく口笛を吹く)。

アンドレエス

二度と斯様無禮を爲えぬやうに、

ウルリヒ

(二人の間に入つて)剛情つ張りの二才ども、静かにしろ。

何奴でも折れて出やうとはしくさらぬ。疳癩餓鬼どもめが。たと

へ世話しなくちやならん事があつても、貴様等のやうな生意氣な

奴等をかまふもんか。云ふ事聞かぬ奴等だ。爰で何をしやうと云

ふんだ、この小童。山へ行つてワイラアの監督でもしろ、それか

ら、苗場から楓を一打取り出して、濕つた苔に包んでおくのぢや。

走郎村から受取りに来る時待たせない様にしておくのだぞ。もう

喋るな。行かんか、こら、早くも行けといふに。

アンドレエス

(云はれる儘に出て行く際、ローベルトに目指して決闘の
意を告ぐ、ローベルト、同じく承諾の目指をする)。

ウルリヒ

で、ローベルト君、さよなら。君は僕の腹の中は解つた筈

ぢや。

ソフイ

貴方のお父さんには隠和に、親切に話して下さいな、ね、

ソフイ

そしてお父さんを、また宅に作れて来て下さいな、ね。

マリイ

然うして下さると、妾も、貴方が、妾を何れ丈思つてゐて下

さるか、知る事が出来ますよ、ローベルトさん。

ウルリヒ

(隠和に)でなければ、もう君は此所には一切来てはならぬ。

ローベルト

僕は行きます。しかし何様ならうとも、僕のマリイさんに

對する権利を放棄する事はありません。(去る)。

ソフイ　まあ、今日は、何て間の悪い日だらう。そして叔父さん、
 貴方までが行つておしまひなさるの？
 井ルケンス　自分だけ額で壁を突き破らうとする男だ。ふむ。儂は其様
 ものに手を借すやうな馬鹿ぢやないよ。(退場)

第一幕をわり

第二幕

シユタイン邸宅の場

第一場

シユタイン　(たい一人。腰をかけて)。仕様のない頑固爺めだ。折角芽出
 度い日も滅茶滅茶になつた。今頃はもう食卓に着いてゐる時分だ
 のに。樹をすかすのが何の役にもたゝぬと云ふ事は、彼の云ふの
 が正當でもあらう、しかし、彼は、此事で乃公を、斯うまで怒ら
 せなくとも可かつた筈ぢや。もとより乃公は、もし分別がなく
 ちやならなかつた。乃公の怒つたのも悪かつた。——妻君や小供に
 は實に氣の毒でならぬ。乃公は行つて謝罪——(立ち上つたが又腰

かけて。何だ、馬鹿くしい。無分別に怒つた通り、又無分別に折れて出るとのか、馬鹿くしい。一國爺奴。しかし、乃公の好い手本だ。少時黙つて居たが、立ち上り、帽子と杖をとる、又投げすて。否、いけない、いけない、そりや決して可けない。何だ、二度とまた消されぬ耻ぢやないか。此度は彼が来なくちやならん、乃公は一步も譲りはせん。彼も、もう、多分、折れて、メラア君ぢやないかと、やつて来るものを急ぎ迎へる。

第二場

ローベルト。シユタイン。

ローベルト (怒つてはいつて来る)。御父さん、貴方は、僕の幸福を、蹂躪すんですか？

シユタイン (驚いて、忌々しさうに)。ローベルト。

ローベルト 貴方は、そんな事、なさる事はなりません。

シユタイン 貴様まで来て乃公を怒らせるのか？

ローベルト お父さん、貴方は、小供から玩具でも掠奪る様に、僕の婚約を壊して了はうとなさるんでせうが、僕は小供ぢやありません。勝手氣儘に呉れたり、取り上げたりする事は出来ません、僕は貴方の御約束を忘れは致しません。貴方は約束を守らなくちやなりません、貴方は僕の幸福を、貴方の一寸の氣まぐれの犠牲にするんですか？ なんば親だつて、そんな事までする権利はありません。

シユタイン それで貴様は、全體何う爲やうといふんだ？

ローベルト 貴方はウルリヒ様と仲直りしやうと思はんですか？ 僕

は其事をお尋ねするんです。

シユタイン ナニ、貴様が生意氣な事を。乃公に答辯させやうと云ふのか？ — 彼の頑固爺の所に行つて然ういへ、全體彼奴が悪いんだ、彼奴が折れて出なくちやならんぢや。

ローベルト ウルリヒ様の所から今僕は來たんです、ウルリヒ様は、貴方に行つて云へと言ふんです。

シユタイン 乃公は些も謝罪りはせん、— 五月蠅い、彼方へ行け。

ローベルト では貴方は、仲直りしやうとは思はんのですね？

シユタイン もとより。彼が謝らなけりや、乃公は思はぬから、貴様は勝手にしろ。

ローベルト 貴方が仲直りしやうと思はぬなら、僕はもう、ウルリヒ様の敷居は、決して、決して跨ぎません。アンドレエスと僕は、一

生の敵となりました、今日は決闘をするかも知れません。— 何うなつても構ふもんか、僕は、僕に出来るだけの事は爲たです。お父さん、— 誰だつて僕を非難する者はありません。たとへ何様な事が持上つても、— 貴方とウルリヒ様とで知るでせう、— マツトさんは僕のです、貴方だつてウルリヒ様だつて、それを掠奪する事は出来ません。

シユタイン 貴様は氣でも狂れたのか、忤。今は貴様の室に行つて、了つたか？

ローベルト お父さん、僕は貴方に尋ねます、—

シユタイン 言ふ事をきくんだ、尋ねるんぢやないんだ。
ローベルト 貴方は俄疴癢が起つてゐるんです、折角癒りかけた疴癢をまた掻きむしつて下さるな、僕の願です。貴方が静かに、正氣にな

るまで僕は待つのです。
シユタイン 乃公は正氣だ、貴様が無理に怒らせようとしたので、それや駄目ぢや。だが、もう一言も喋つてはならんぞ、聲を出す事もならんぞ。

ローベルト (夢中になつて) 一言もならぬ? いくらでも言ひます、此の胸の中にあるつだけは、いくらでも云ひます、悉皆言つちまひます。番頭のメラアが喋るのなら、お止めなさつても可い、僕をお止めなさる事は出来ません。堪忍がならぬなら、御勝手になさい、彼方へいらつしやるなり、此方に御居でなさるなり、御隨意です。——僕は申します。僕は、もう小供扱ひにされるのは堪えられません、それを貴方は知つて下らなくちやならんのです、僕は自由で、由に獨立して世に立つんです、貴方は僕を輕蔑する事は出来ませ

ん、貴方がたの玩弄球では僕はありませぬ。

シユタイン 又、例の威喝文句を列べるのか、乃公はもうそれは暗記したよ。貴様は尙だそこに居るのか、去つてしまつたと乃公は思つてる。だからな、話したけりや話せ、乃公は止めぬ。

ローベルト (決心の聲音にて) 後で悔んでも駄目ですよ、僕が死なうと相手が死なうとそれは僕の權利だ、其の責任は貴方とウルリヒ様にあるんだから。

シユタイン (瘡癥を悔ひはじめ) 忤——

ローベルト さようなら、大方、これが永久に、さようなら。御機嫌よう(烈しく出て行く)。

第三場

シユタイン一人。後、僧登場

シユタイン (呆然と、ローベルトの後から一步二歩歩んで) 何處へ行くんだ、——ローベルト、悴——仕様のない奴だ。もう疥癬を起すまいと思ふと、直ぐに又、——どうも皆で乃公を怒らせるやうに、約束でもしてる様ぢや、萬一、ほんとに彼奴が、アンドンエスとやつつけた日にや、——でも乃公が後追つかけて、今更呼び止める譯にや行かん。——また歸つてきたのか。

僧(登場)。

シユタイン オ、和尚様ですか。まことに丁度いゝ所で……。

僧 もう、ちやんと聞いてゐます(握手をする)。

シユタイン 悴のローベルトですが、彼が——

僧 すんでの事で、今衝突らうとしました。またく家出しやうといふのですか、え？ 大丈夫、落着をつけてあげませう。

シユタイン それから、彼の頑固爺とも、また、何しましてね、——

僧 疾うに知つてゐます、例の喧嘩でせう。何日の時代になつてもそれです、而して其の落着は、誰だつて前以て、式の通り知つてゐませう。

シユタイン 此度はさう明瞭とはわかりませんよ。

僧 然様です、此度は例よりは、御子息が加つてゐるだけ、餘計に面倒でせう。そして御子息は、またアンドンエス君とおつぱじめると云ふんでせう、しかし、——

シユタイン ローベルトぢやないか知ら？ 今はいつて来るのは？

第四場

メラア登場。前場の二人。

シユタイン おやメラア君だ。如何だった？ 彼は折れて来たか？

メラア なかなか以て。貴方は決してウルリヒを、免職させる事は出来ないと、歸つて貴方に云へと、然ういひました。

シユタイン 儂は出来ないつて？ (沈着いて) 儂がさせやうと思はぬと云ふのだらう。——して君は、悉皆行つて試たかね？

メラア 悉皆試りましたとも。

シユタイン 書物獵師の事で威したかね？ 奴が山守になるかのやうにさ？ そして君が直ぐ奴の所へ任命に行くかの様に？ 萬一ウル

リヒが

メラア かの様にですつて？ ——私の委任はたしかにやりました。書

物獵師は従順に、悉く命を拜して感謝しました。其事を私は今貴方に復命するんです。

シユタイン 彼奴が拜命した？ ——彼奴が拜命したんだと？ ほんと

に彼奴が拜命した？ 何といふ、よく云ふ事さく人間だらう？ ゴットフリードは。そして又、君も君だ、大急ぎでさ、——全く

君は氣が狂つたのか？ ウルリヒも其には随分まゐつたらう。分別もついたに違ひない、讓つて来ただらう儂が疥癩まぎれに云つたのは、そりや君の聞いた通りさ、だが、君も、多少其所は斟酌してくれにやならん。儂が心からさう考へてゐるか、考へてゐないか、君は知つてる筈ぢや、彼はなかく偉い、價值のある男ぢやないか、しかし君の行つたのも可い、正しく聞き取つたのだから、

悪いた云はぬ、——だが、思ひ出してみると、もう後くなつた。君は平常、此度の縁組には反對だつたのだ、それを氣付かない儂が悪かつた。

メラア 私に當家に、二十年も御奉公致して居りますが、正直過ぎる位の男たといふ事は、もう、大抵わかりさうな、充分な年月と思ふのであります。私は、仰せ付かつた通り、寸分も違はずに行つただけでございます。しかし、私の功績を認め下さらんなら、私はただ、御當家の品位を、ちつとも落した事はないと云ふ事で以て、自分を慰めやうと存するのでございます(と云つて自分の仕事にかゝる)。

シユタイン だから。その所謂當家の品位が君に御禮を云ふのさ、私ぢやない。(一寸黙つて)だが、勿論、他に仕方はなかつたらう、とこの結句は然う云はにやならぬ事はわかりきつた話だ。氣にかけてくれるな、御苦勞だつた。儂が「主人」を振りまはし過ぎるのだ。

附 そして、それは、やつと此間なつたばかりの「主人」でさね。
シユタイン どうも、悪い都合になつて了つた、井ルケンスの前ではあり、他に仕方がなかつたのです。——めちやく／＼な言を云つたのです、お互に心の底から然う思つたのぢやないけれど、双方共「主人」を押つ透さうと、一歩も退かなかつたものですから、こんな運命になつたのだ。

附 それは然うです。又、疝癪まざれに行つた事を、分別が付いてから詫るといふも、變にきまりの悪いものでね。しかし何故また二人つきりで行らなかつたのでせう?
シユタイン (歩み出して)否、どうも然うは行かなかつたのです。——そ

れから、又、疥癩持の悴の事を考へますとね、——メラア君、今直ぐ迎へにやつてくれ、ローベルトを、探さしてくれ、儂は彼れに話しをしなくてはならん。

メラア (出て行つたが、又直ぐはいつて来る)。

シユタイン 今度は儂は讓歩はしません、今度は彼が讓歩しなくちやなりません。免職も撤回はしません、彼は其の譯がわからなくちやなりません。もう解つてゐるでせう。だが、和尚様、儂の耻にならんやうにして、何とか伸直りをしたいもので、斯様にくよくよく考へてゐる事を、彼に知らせる法はあるまいか？ で貴方、彼の所に行つて下さる譯にはゆきますまいか？ もとより、地位は、彼は、當分退かになりませんが、彼の今迄の俸給を二倍して、今後、渡さうと思ふのです。當分の内、恩給と見做して貰ひたい

のです。兎に角、今度の事は、彼が主だつた責任者と儂は思ひます。だから此の免職で、彼は充分その罪を償ふのです。

儂 直ぐ行きませう。

シユタイン 儂も少し其邊までお伴しませう。一人で散歩するのは嫌だから。

(二人共、左側より退場。)

第五場

メラア一人。後、ゴットフリイド登場。

メラア レエライン家と縁組の事が出来なかつて兎に角、シユタイン父子は天晴行てのけたと云ふものだ、反對になつたぢやないか、今迄は何時でも旦那からばかり譲つて出るのが癪に觸つたからさ。

「今度旦那のやり方は全く愉快だ、叱られたつて何でもありやしない。ハテ、誰か、戸をたたくやうだ。(戸の方を見て)や、お二人が裏口から御出になつて仕合だつた。書物獵師だ。何といふ爲體だらう。これで矢つ張り人間かね。(酔つぱらつたゴットフリイドを扶けて連れて来る)

ゴットフリイド (まだ樂屋の方で) シュタインは何處だい? おい、彼奴あ何處にゐる? シュタインはさ。君はメラア君か。

メラア (恩に着せ氣味で) 君は、また、矢張りゴットフリイド君か、相變らず飲んだくれでさ。全體、何爲に來たんだ?

ゴットフリイド (メラアはゴットフリイドを椅子にかけさせる) 禮に來たんだ、禮を言はねばなんねえのだ。シュタインをつれて來てくれ、禮をいふから、—それや流行なんだ。

メラア その爲躰でかい?

ゴットフリイド (メラアに、強いて腰をかけさせられながら) 爲躰だと?

此の爲躰がお前にどうした? 乃公は禮を云はうてんだ、その爲躰で結構ぢやねえか、乃公あ此の爲躰でかまやしねいや。シュタインは在宅かね、え? おい、どうだ?

メラア 在宅ぢやないよ。在宅ぢやないので幸だ、君は仕様のない人間だね。最負にした乃公等が、好い事を爲てやると、すぐ君は、百倍も馬鹿な事を仕出かして、壞してしまふから仕様がねえ。君を山守にした事を、旦那はもう後悔してござるよ。君、すぐ又、地位返上と來にやならぬ。

ゴットフリイド お前は馬鹿だね。其處はお前さん。其處はお前さんの御最負かね。お前さんがシュタインとウルリヒの仲を、レエライン

の爲に割かうと思はにや、なあ、此様事は迎も、なあ、又乃公が
 お前みたいなの、面當腹で氣が、むしやくしやとなつた、メラメラ
 っとした、最負の引き倒しの、馬鹿な奴さんだつたら兎も角さね、
 可いや。三日天下ぢやねえが、一日山守かね、二日たあ續きつこ
 なしさ、と云ふのは鱗鏝師どもが仲直りまでだからな、それで、
 乃公の山守は、直ぐお終ひてえんだ。お前は下戸だから話せて、
 それで、お芽出度い奴さんだなんて。一日か、よしよし、一日の
 山守だて、犠牲の——犠牲の山守かな。——だが其の一日を巧く
 利用したらうちやねえか、おい、兄貴あのアンドレエスにさ、利
 用したのよ、兄貴。此方へ寄りなよ、乃公は嬉しくつてなんねえ
 や、兄貴。メラメラッとした、最負の引き倒し屋、おい。(メラア
 の首に抱きつく。)

メラア (耻ぢて非常に周章で、却けながら)。何だい人が見るといけな
 い、耻と思はぬのか。(嚴となつて)彼の、アンドレエスと何うした
 と云ふのだ?

ゴットフリード 行つたさ、行つたさ、行つつけたんさ、可いかね。昨日
 の事だ、可いか、又、あの爺の事だ、お前知らねえのか、可い
 か。爺が聞いたら、嗚怒つて、彼の猫髯を自分で引きむしるだら
 うせ。

メラア で、アンドレエスと何んな事をしたのだ?

ゴットフリード 何だも。何もねえのさ。今にわからあ。え、おい、飲み
 度え、飲みみてえな。これが乃公の泣聲だて、乃公の病氣だ、乃公
 のやくざな所だ、乃公の痲痺だて、而して、これで、此の若い年
 して死ぬんだな。どくだい、シムタイムは?

メラア　まあ乃公の室に來いよ、珈琲でも飲んで正氣になるさ。それから、乃公は、鎔鐵爐へ行かにやならんから、寂寞谿の水車まで送つてやらう。彼所からは君の宅まで、もう直ぐだから大丈夫だ。ほんとに、縛てでも置かなくちや、直ぐ自分で幸福を掻き除けてしまはうとするのだ。

ゴットフリード（メラアに伴れられながら）彼は何處にゐるんだ？　おい、こら、何處に居るんだ？　シュタインは。

山林守住宅の場。

第六場

ツファイイ一人　稍あつてワイラア。其後、ウルリヒ
登場

ツファイイ　（窓を閉めながら）ローベルトは、未だ歸つて來ないのねえ。和尚様も御見えにならんし。

ワイラア　（中央の戸からはいつて來る）乃公が「言はねえ事つちやない、え、おい、全體誰が權利は有つてゐるのだい？　ふん。時に、奥さんは、何だか儂のを納つておいてやるとか仰つたね。餘り食ひ度くもねえて。へ、へ。

ツファイイ　冷くなつてるよ。（暖爐から食物の盛つてある皿を出し、パン其他を棚から、食卓の左の方にならべる）

ワイラア　誰だつて何時かは冷くなるやつさ。（腰かけて食事にかゝる）
ウルリヒ　（側の戸口から登場）お前あの竜堂の森から、鹿でも嗅ぎ出して追つて來たのかね？

ワイラア　お前様の鼻つ柱を折つてやらうて、云つてましたせ。何で

も、其の通りでさ。亭主と女房、旦那と下男、だつてもさうさ。

一旦斯うとなるが否、戀も忠義もおさらばと来る。

鼻柱を折るつて、全體何の事を云ふんだね？

村境の藪の所に、四本の手足で立つてゐたんです、燕麥の

中にさ。喰たり、飲んだり、ぐでんぐになつてさ。

誰が？

竜堂の森の鹿がでさ。

(言葉に力を入れて)。鹿は手足は有たんよ、足だけさ、加之、

喰へはするが、飲みはせんよ。

然う云つておいても可いや。

(ワイラアが食事の世話をしながら)。一體何の事だね？

ワイラア

ソファイ それだけで解るものかね。人が聞かうとも思はぬ時は、勝手に一人で喋り散らす癖に。

ウルリヒ (ワイラアの前に立つて、嚴と)。ワイラア、何の事だと尋ね

てをるのが聞えぬのか？

ワイラア はつはつ、書物獵師の事です。六尺位の鼻が高うなつたで

せうよ、もはや金紐の帽をかぶつて、山刀をぶらさげてね、麥酒、

ブランデエで平常よりも酔つばらつてやあがつてね。蹠跚してる

もんだから、道巾が平常より廣くでもなくつちや。

ウルリヒ それ限かい？

ソイラア その位のもんだ。時に、繁葉ケ森の山守は、眞實は誰です

？ え？ 奴はもう樵夫にすかすやうに指圖してましたせ、奴が

山守ですか？ お前様もまだ山守のやうにもしてゐなさるから。

ウルクヒ 儂が依然山守さ。儂は繁葉ケ森の山守だ。他には山守はるやしない。

ソイラア お前様はそれを押透さうとなさるのか？ 儂はお前様に申しますかね、今日では権利を誰が有つてゐます？ え？（錢を數へる様子）をしながら何事でも金のある奴に従つておかねば。——誰か急いで来るやうだ？

第七場

井ルケンス急いではいつて来る。ワイラアは矢張食事中。ウルクヒ。ソファイ。

井ルケンス 全體何が起つたのだね？ や、今日は（と、は入つて來なが

ソファイ (愕いて) 何が？ おや、まあ、どんな事が？

ウルクヒ 早く云て下さい。

井ルケンス お前様も其の頑固を考へつくだらうて。

ソファイ でも、どんな事ですか？

井ルケンス 儂が知るものか。平盆道で、儂がワイラアに出逢つたら、

手真似で以て、誰かを滅多打ちに打つ様な振をして、此家を指す

ちやないか、

ウルクヒ それは山を指したのだらう、すかす事を真似たつもりさ。

井ルケンス 儂の歸路は違ふのだが、兎に角來て見ずばなるまいと思つ

てさ。所が、此家からさう遠くない、つい其處で、誰だか考へ込んで立つてる者がある、見ればアンドレエスであるから、儂が、何をしてをるのかと近寄つて聞かうとするとそれを氣取つたかはや

馳け出して、怒つたやうに僕を見て、去つてしまつたよ。呼びかけたけれど、耳に入らばこそ、追つかけたのだが、雪を霰さ、辯別も何もあつたものでない。

ソフィイ　でも、又何するのでせうねえ、まあ、ほんとに。

ウルリヒ　(嚴となつて、窓から。アンドレエス。

ソイラア　そら、もう、やつて來まさあね。

第八場

僧登場。前場の人物。ソイラアは依然腰かけたまま。

ソイラア　これは、和尚様。(挨拶する)。

ソフィイ　まあ、好い所に。和尚様。

ウルリヒ　貴方は婚約式に御出で下すつたのでせうね、ですが、和尚

様。

僧　またお前様がやらかした事は、私は皆知つてゐますよ。

ウルリヒ　それは、シュタインの方がやらかしたんですよ。

僧　今そのシュタイン様から來たのですが、頼まれて來たからと云

つて、お前様、ちつとも不親切な仕方とは思はぬでせうね、私が

頼まれて來たのですから。

ソフィイ　シュタイン様のお頼みで、和尚様が來して下さつたのだから、

屹度、悉皆、原の通り好くなるに違ひない。でも、和尚様、

家の人が何處まで頑固だか、貴方は御存知ありますまい。

僧　何がですか？皆知つてゐます。しかし、御主人が一番悪いのち

やありません、然うでなければ、私はシュタイン様の使者となつ

て此家へやつては來ませんシュタイン様から第一番に仲直りしや

うと云ふのです。

井ルケンス 儂が主人なら、然うはしないな。

僧 ウルリヒ様、シユタイン様はね、折角の芽出度い今日を、悪く

した原因は、自分の疝癪にあると、氣の毒がつてね。

ウルクヒ そら御覽、井ルケンスさん。

僧 免職と云つた事を、悪く思つては呉れるなつて。

ウルクヒ そら御覽、ワイラア。

僧 で、此れは、勿論此の儘に濟して置いてね。

ウルクヒ 此の儘に濟しておいて？ ——和尚様、何ういふ事なんです、

それは？

僧 耻にならぬやうに、一旦云つた事を、直ぐ取り消すことも出来

ないから、斯う云ふので、——其所はお前様も察しなくてはなりません

せん。

ウルクヒ (長く語を延いて) 然う？ ——では、

僧 差當り、繁葉が森の山守となる譯です、それはもう、今さら變

更もされぬものですから、

ウルクヒ 貴方は然う仰りますがね、儂は貴方に申します、和尚様、

書物獵師は山守ぢやありませんよ、繁葉森の山守は儂です。儂が

その山守です、和尚様、何時までも儂が山守です、和尚様、儂が

儂の仕事、何か疎略にでもした事を、シユタインの方から證據

立て、來る迄は、あくまで儂が山守です。

僧 でも、お前様も察してくれなくちや不可ん、シユタイン様の方

で御自分の悪かつたのを贖つて、從迄通り兩家の親睦を恢復しや

うと思つて、どれだけ考へてゐるか知れやしない。お前様の今迄

の俸給も二倍にして、今後恩給といふ事にして受取つて呉れるやうにと云ふことだね。

ウリヒヒ (歩き出し、口笛を吹く)。

僧 儂の委任はそれだけです、ウリヒヒさん。それから又、

ウリヒヒ (僧の前に立ち止つて) 何の事です。それじや儂の名譽を賣

收しやうといふんですか？ 和尚様、儂の名譽は商品ではありま

せん(また歩き出し、口笛を吹く)。

僧 しかし、それは餘りですよ、ウリヒヒさん。

井ルケンス 人の云ふ事を、聞き入れるやうな人間だと好いが。

ウリヒヒ (又、僧の前に立つて) それは御慈悲の俸給ですか？ 儂は

少しも御慈悲にあり付く必要はありません。儂は働く事が出来ま

す。儂は只では一文も貰はない。儂は施與物は受けません。儂は

知つてゐます、儂が悪くない限り、儂を免職する事は出来ません

のぢや。その例は百もある、青土村のルウベルトも然うです。萬

一儂がおめく、免職されやうものなら、それこそ、儂が悪かつた

と白状すると同然です。彼のルウベルトに付いて、誰だつて其の

證據を擧げる事は出来なかつたから、彼は依然免職はされなかつ

たのです。免職でもされやうものなら、誰が其の人間を又使つて

くれるものですか。和尚さん、儂は、父や祖父から、名譽といふ

遺産を受け継いで居ります、それは儂の子や孫にも傳へねばなり

ません。儂の親父は、儂の前に、山守の職に居つた、儂の祖父は

父の前にその職に居つた、世間では、儂の事を、此の谷村での累

代山守と云つて居ります。それが儂に至つて、始めて免職されな

くちやなりませんか？ 儂の山林に行つて見て御覽なさい、和尚

さん、成程と合點の行かぬ事はない。儂は山林をお寺の所までも
 擴げた。彼處に儂の父や祖父は眠つてゐる、その證據は墓石にも
 やんと記してある。皆忠實な正直な主従であつた。山守仲間の體
 面を汚さず、皆青々と繁つた樅の樹蔭に眠つてゐるのです。貴方、
 後、いつか、儂の子孫が其處へやつて來て、此の樅を植へた者は、
 何故此の樅の下に葬られなかつたと尋ねたら、どうでせう。我等
 の先祖の墓は、何故これだけしか無いのだらうと尋ねたら、どう
 です。免職されたのか、免職されるやうな不埒な者であつたのか、
 と思つたら、どうだらう。そして、彼の、お寺の塀側に、儂の墓
 を見付出したならば、どうだらう。和尚様、若し貴方は名譽を失
 つて生きてゐる事が出来るなら、貴方はそれで可かもしらぬ、否、
 決して可くはない、甚以て怪しからぬ事つた。しかし、和尚様、

儂は爰で二つに一つを擇らねばなりません、樅の樹の下に、和尚
 様、儂はこゝの山守だ、それがならぬといふのなら、シユタイン
 は自分を悪者だと公然説明するやうなものだ。儂の財産は皆此の
 山林の爲めに使つてしまつた。しかし儂は一本の杖より外に、今
 は何物をも得やうとは思はぬ、たゞ其の杖にすがつて此の世を廻
 り、此の老年の儂が、新しい或る職業を尋ね出さうと思ひます。
 すると、儂の耻辱は皆消え去つて、彼のシユタインに纏ひ付くだ
 けた。儂は權利がある、儂は飽までもこれを主張するのです。
 井ルケンス お前様の權利かね、ふむ、その權利を何う爲やうと謂ふん
 だね。權利といふのは錢の事だよ。權利は富者の玩具でね、馬や
 馬車なんかを有つてゐると同じことぢや。ふむ、お前様の權利や
 ら、無權利やらかね。お前さんの權利といふのは、そのお前様の

頑固の事なのだ。お前さんは妻子の衣服まで剃ぎ取つて、其の頑固を貫うといふのだからね。

僧 さうではないが、――

第九場

井ルヘルム登場。前場の人々。

井ルヘルム お父さん、兄さんは、戸外に居ますけれども、内へは来ません。貴方がお呼びだと申したのですけれど。

ソフイ お來で、井ルヘルム、二人で兄さんの所に行かうよ。

ウルリヒ 静かにしなさい、又、いろんな事を云つて無茶苦茶にして丁ふのだらう。黙つておとなしくするが可い。でなくて、出て行くなら、あとから門を閉めてしまふぞ。(嚴として後面の戸口の方)

へ行き(アンドレエス、直ぐは入つて來い。わかつたか。

第十場

アンドレエス登場。前場の人々。

アンドレエス (戸口まで來たが、人々の居るのを見て、また去かうとする)。

ウルリヒ アンドレエス、此處へ來い、此の、お前の長官の前に来るのだ。(訊問するやうな風に、其處に腰かける)

ウルリヒ、ソフイ、ワイラア、井ルヘルムは左側に。僧と井ルケンスの二人は右側に。アンドレエスは中央に、頭を垂れてゐる。

ウルリヒ もつと此方へ來なさい、山林監督助手アンドレエス。お前

は何處へ行つて来た?

アンドレエス お父さん、私は獵區からまゐりました。

ウルリヒ お前の鐵砲は何うした? アンドレエス。

アンドレエス (黙つてゐる)。

ウルリヒ 誰が待つてゐるのぢや?

アンドレエス (打溢りて) 書物獵師が。

ウルリヒ (不知不識立ちあがる)。

ソフイ (大へん心配して) まあ、貴方。

ウルリヒ (再び腰をおろし) 誰でも嘴を突込んではないぞ、今爰

では、山林監督助手アンドレエスと、其の長官ウルリヒとだけが

話をするのだから。アンドレエス、――

アンドレエス お父さん。――

ウルリヒ 顔を擡げないか。

アンドレエス 僕は、もう、誰にも逢ふ事は出来ません。僕は給仕にで

もなつて、亞米利加へ行かうと思ひます。許して下さい。

ウルリヒ アンドレエス、長官の儂がお前に尋る時は、お前は答辯を

しなければならぬ。書物獵師は何をしたのだ? サア云へ。

アンドレエス 僕は、苗場から、楓の樹を持つて来やうと思つて居まし

た。――

ウルリヒ 儂が命令けた通りにな。

アンドレエス 其處に彼奴が來まして、――

ウルリヒ 書物獵師がね。それから? アンドレエス。

アンドレエス 燒山村の樵夫を六人従れて、――

ウルリヒ 燒山村の、――。それから? アンドレエス。

アンドレエス 彼奴は酔つぱらつておまして、

ウルリヒ (低聲で) おきまりの飲助だものだからね、——(ウルリヒの一

瞥に逢つて、何も云はなかつた風をする)。

アンドレエス 樵夫どもも酔つぱらつて居ました。また籠瓶を傾けて飲

み廻しました。やつつけろと彼奴は云ふのです。ウルリヒは偉ひ

立派な主人振りを行つた、だから免職されやがつて、と斯う云つ

たものですから、僕は詰めかけたのです、

ウルリヒ む、つめかけて？——(と立ちあがる)。

アンドレエス 而して云ひました、貴様は言語道断な悪口吐だ、そして

元來此の山林に手を出す事はならんのだぞと。

ウルリヒ む、然うぢや、此の山林に、——

アンドレエス ぞして何處へなりと、貴様の行くべき所へ去せろ、と然

う云つてやりました。

ウルリヒ (力強く) 行くべき所へ、然うぢや。(腰をおろし)而して、彼

奴は？

アンドレエス 笑つたのです。

ウルリヒ (立ち上り、又腰をおろす、口笛を吹き、食卓を指にて叩き

それから？——

アンドレエス ぞして斯う云ふのです、此奴何をするつて。

ウルリヒ (強く) アンドレエス。

アンドレエス お父さん、——

ウルリヒ ぞして、お前は？ それから？ それから？

アンドレエス 乃公の山林の樹を奪ふのか、(低聲になつて)此の樹盗人を

取ちめろ、此の苗盗賊を、と斯う云ふのです。

ウルリヒ (暫く黙つて) 〇そして樵夫どもは?

アンドレエス 僕を取り押へました。

ウルリヒ で、お前は?

アンドレエス 多勢に無勢、——鐵砲も役に立たずに、——

ウルリヒ (自分も一緒に力瘤を入れて) 役に立たなかつたか、ちえつ。

七人と一人だつたか。

アンドレエス 非道い事を、しやうとするぢやありませんか、夫で僕は

荒れ出しました。彼奴等は僕の衣服を脱いで、——脱いで了ふので

す。乃公を殺してしまへ、でなけりや、乃公を生かして放ち次第、

貴様等を殺して了ふ、と僕は然う云ひました。そしたら彼奴等は

笑ひました。彼奴等は、——それから、——僕を、——

ウルリヒ (踊り上つて) 〇そして彼奴等は? ——

アンドレエス (反抗の様子で、父には嘆願する様に) 〇お父さん、——

ウルリヒ 〇そして彼奴等は? ——

アンドレエス 彼奴等が、——

ウルリヒ (低聲で) 〇彼奴等が? ——

アンドレエス (夢中で) 〇お父さん、僕は、話す事は出来ません。僕は斯

様耻を、誰からでもまだ、かゝされた事がありません。

ウルリヒ (深く溜息つき) 〇よし、後で聞く、——アンドレエス。(暫黙つ

てゐたが、アンドレエスの前を過ぎて歩み出す、アンドレエスは

母の方へ行く。) 好い天気ですな、和尚様、——僕は腕が僕麻質斯で

掻きつけて了たかね、また、蚊が頻りに刺すわい、——今日また暴風

雨になるだらうな。——アンドレエス、彼奴はお前を、——親たる僕

でさへ、そんな、非道い事は、決してせぬぞ、それを、他人が、——

しかも、彼様な奴が、——否、何も云はぬ、アンドレエス、——よし、解つてる。(歩き出す)。

ソファイ (アンドレエスに)。昨日お前が書物獵師を怒らしたものだから。

ワイラア 方公が前以て、云はねえ事か？

ソファイ お前真青だよ、お薬を上げやうか。

ウルリヒ (アンドレエスの前にすつくと立止る、ソファイは心配して

退る)。こら、アンドレエス、ワイラアもだ。(ワイラア進み来る)。

氣を付ける。銃を持つて我が山林を歩く奴は、誰だつて構はない

審問するんだ。可いか、解つたか？

ワイラア む。

ウルリヒ 審問、誰何するのだ。儂は此の山守ぢや、他に誰も山守は

ない、お前達は我が家來ぢや。シユタイン親子は取り除けて、其
他には誰だつて構ふもんか、銃を携へて此の山林に来る奴は、可
いか、何奴だつて構はぬぞ、山守の青服を着てを つても關はぬ、
着てゐなくてもぢや、——其者は野獸盜賊だ、咎めるのだぞ、止れ
ッ、銃を捨てろッ、と斯う云ふんだ。審問書にちやんと書いてあ
る。其者が銃を捨つるなら可し、捨てなけりや射殺しても可いの
だ。審問書に書いてあるのだ。——そしてね、井ルヘルム、お前は
今から町のシルマア辯護士の宅へ行つて、今度の事を悉皆話すの
ぢや。辯護士は、シユタインと書物獵師に對する訴訟を起してく
れねばならぬ、そして彼等を法庭に渡すのだ。忘れてはならんぞ、
井ルヘルム、儂の父も祖父も山守だつた事を、また世間で儂を
累代山守と云ふ事もぢや、青土村のルウベルトの例もだぞ、こん

な事は緊要ぢやないが、萬一の用心に。此の山林が西北に向つて
ゐる事も、それから、儂が悪漢となつて行動すると謂つて、シエ
クインが儂を免職しやうとする事もだ、忘れてはならんぞ、可い
か。此から行くと、夜にならん前に歸つて來られる。アンドレエ
スと儂と峠茶屋まで送つて行く。お前が歸る時は、アンドレエス
が茶屋で待つてゐる事にしやう。(銃を擇んでゐるアンドレエスに)
黄色い革紐の着いた雙身銃を持って行きなさい、儂は他を持ってゆ
くから。

アンドレエス (言葉通りにする) お母さん、襟巻に何か下さい、悪寒が
しますから。

ソフイ (布片を棚から出して) では、お前は残つたら何うです、ア
ンドレエス、大へん怒つた後で、また。(襟巻をアンドレエスの首

に手傳て巻いてやる)。

非ルケンス 其様事をしたら、お前様だけが、愈以て極悪人になる事が、
わからんのか？ お前様は、實た明盲目だ。

儂 免職の故で訴へると謂ふのですか？ それは出来はしませんよ。
ソルリヒ (山守が刀を佩びながら) それを儂がする事は出来ぬて

それでは、儂を免職するのを正當と云ふのか？
儂 それは無理です。心情で云へば不正ですが、法律の前では然う

は行きません。
ソルリヒ 心で正しいものは、法律でも正しくなくてはならん。

儂 その譯を説明したいのですけれどもね、——
ソルリヒ 説明するて？ 爰には、貴方の頭の中の、拗り廻しの考へ

まで明瞭とわかつて居ます。世の紳士などいふ連中は、人の元來

持つてゐる正当な考を、ませつかへさうとしてゐるのですね。『でも』とか、『若し』とか、條件付きの事ばかりで喋つてゐるのだ。此の『でも』や『若し』は、頭の中から、拗り出したもので、實際の、腹の中の事、心の中の事は知らないのだ。これが權謀術數といふものだ。だが、可いわい、和尚様、一つ説明を願ひますかな。だが、『諾』か『否』かで願ひませう。其他は皆不可ん。『でも』や『若し』は眞平だ。主人シエタインは儂の名譽を奪はうとするのだ、儂の忠實正當に對し耻辱を以て報ひやうとするのだ、儂は六十五といふ老年をして、悪漢になつて世間に立たねばならぬと謂ふのです。で、和尚様、『諾』か『否』かですぞ、どうです、これは正當ですかね？

僧 『諾』か『否』かですと？——當然です、それは一般から云へば正しい事ぢやないのです。しかし、——

ウッリヒ (悦んで、勝ち誇つたやうに。)で、正しい事ぢやありませんね。正しくない事は不正に違ひありません。それで、法律といふものは、不正が起らぬやう、天下にある譯のものなのです。儂の善良な正義を誰だつて掻き亂す事は出来ません、ですから、儂に、讓步せよといふ語を吐く奴は、最早儂の友人ではありません。あめん。『でも』なんぞと云つて、正を不正に爲やうなら、儂は寧ろ野蠻人になつて生活しやう、神の地上に、人間で居るよりは、いつそ情誼深い獸類に仲間にならうと思ふのです。お前達、準備は出来たか？ アンドレエス。

アンドタエス と井ルヘルム。出来ました。

ウッリヒ では來い、アンドレエス、井ルヘルム。他の事は何うでも構はぬ、和尚様、併し、正義はね、和尚様、正義は何時までも正

義なのでござ。ウルリヒ行く、アンドレエス、井ルヘルム續く。
幕落つ。

第二幕をばり

第三幕

峠の茶屋の場

第一場

リンデンシュミイド。亭主。メラア。後、フライ登
場。

メラア 御亭主、一杯お呉れ。(獨白)既う書物獵師は歸り着いたらう。
寂寞谿の水車場から家までは、さうさ、物の十四五分も経れば充
分だからな。——時に、今晚は。

フライ (まだ戶外で)。通りかゝりに一杯引つかけるかな。(店にはいり
来る)。それから、彼方の公爵の領地へ行つてやらう、面白い都合

になつてゐるからな。

亭主 其様面白きは直平だ。ハア何卒召上れ、番頭さん。

メラア たいした御相伴だな。

亭主 まあお掛けなさい？ 番頭さん。

メラア 有り難う。霽の中に、溶鑪まで行かにならるので、人足

どもはもう先へ行つて了つたからね。(杯を取上げながら、獨語)シ

ティン商會と縁組が巧く運んでくれれば可いが。

フライ 彼方の公爵領地では、もう、上を下への混雑だが、此方

う、今日日におつぱじまらあ。彼の累代山守が、もう、それ、自

分の邸で通行人を差止めてるのだから。

亭主 馬鹿な、お前様。彼の方は、正直一方の人間ですがよ。

フライ 正直にも程があらあ。何時迄も正直にやつてる奴は馬鹿野郎

よ。見つかり次第、彼の書物獵師を、射殺してやらうと云てるさ

うだ。(其の身振をする)彼の山守は、さうくくづくする男ぢや

ないからな、鬼のやうに殿い奴で、斯ういふ風に白い猫髯を生し

てるやあがる。

リンデンシユミイド (枯聲で笑ひながら)ほほう。

フライ (リンデンシユミイドを見て) 貴様、何だな。彼の書物獵師に

味方をしやうといふのか。え、おい、リンデンシユミイド。

リンデンシユミイド (前の通りで) 彼の書物獵師にね。

フライ 彼奴と貴様と、大の仲好さ、赤坊だつて知つてらあな。

リンデンシユミイド (前の通りで) は、は。

フライ 山守が云つてたのを、彼のワイラアの奴が聞いたさうだ、そ

りや確かだ。斯う貴様に話すんだが、もう、やつつけたも同然、

確かなんだせ。

リンデンシユミイド いや、彼の山守は其様な馬鹿な事はせぬよ。——(密かに) 一體、あの裁判官なんて奴等が、世間に居なけあ可いのだ、

——また彼奴等も居ないと好いが、(と巡査の身振をする)。

フライ 裁判官なんて者はお廢した、そんなものは——今ちやあ、(と卓を叩いて)自由の世だよ。山守萬歳。何奴だつて彼を批難する奴

あ、——否、何奴と名指すわけぢやねえが、——

メラア (急いで) あ、御亭主、もう八時だらうか。

亭主 大それたお急ぎですな、番頭さん。

メラア 人足どもが、製鐵所で待つてゐるから。

亭主 お釣錢をあげませう。

メラア (もう戸口の所に来て)。それはよろしい。また明日のじとか

う)と。去る)。

第二場

メラア去りて、以前の人物。

フライ (立上り、出て行くメラアの後から拳を握りながら身振をして)。

何を明日のにしとくのだい？ 貴様も、貴様の同類もさ。貴様等

にや、報ふて来る事があるのぢや。おい、リンデンシユミイド、

手前あ、乃公と一緒に、彼の公爵領地へ行かねえか？

リンデンシユミイド 乃公あ乃公の行く所が別にあらあ。(前方に寄つて來

て)彼の裁判官の奴ども、畜生奴。乃公達みたいに正直な野郎は、

樹の葉が些と動いても、愕かずに居られねえし、又、後から、

巡査めが、やつて來やしないかと、心配で——ならねえのだ。

フツも破れ被れた。裁判官なんて、乃公は貴様に云つて聞かせる。十年内にや、巡査なんて、どんなものであつたか、人が怪しんで尋ねるやうになるせ。もう自由の世だ、制度もへちまも有つたものか、誰でも思ふ存分の事をする事が出来ら、巡査もなければ、裁判官もねえ、手前に云つて聞かせるがね、牢屋もなければ、手錠も鎖もありやしないぞ。神様が兎を貴族どもの専有に造つたのなら、其の毛皮に焼印でも押してある筈ぢやねえか。兎位の奪るのが何だ、けちな話だ。今になつて人間と云ふ奴はやつと目が覺めて來やがつて、牢に入つてる奴等は、皆辛いのを辛抱してゐる。尊敬しなければならぬ人間だ、上流社會なんて野郎どもこそ、悪漢なんだ。勤勉な奴等は、眞實に悪漢だ何故つて、乃公等のやうな、働くことの嫌な、正直な人間が貧乏なのは、彼奴

等が働く爲だ。手前、新聞に出てるのを見たか。山守が書物獵師を取つ捕たら(と身振をする)、何奴だつて山守に兎角云ふ事は出来ぬぞ。書物獵師は正直な者が盗みした時、牢にぶち込んだ奴ぢやねえか、畜生奴。

リンデンシユミイド 罰受けるやうな氣遣ひはねえのか? 大丈夫か?

以外の人だつて可いかね? 山守でなくても罰は受けまいかね?

フライ 以外の人だつてさ、と言つてるぢやねえか。ほら、彼方の公爵領地ぢや、乃公達みたいな正直な者が、城に火を放けて掠奪を演つてるせ。澤山の人間どもが、非道い目に逢つてゐらあ、ところがある、誰も何とも云ふ事あ出来やしねえ。誰だつて、演り度え事はやつつけて關やしねえ。ウルリヒの爺も、さう追窺はねえでも可いや、書物獵師は、あの寂寞谿に蹣跚いてゐやあがるから、

帽子も失くなつてしまつた、——
リンデンシユミイド (座撃ける様に衣囊に手を入れて)。何にも無えか、——
全く何にも無え、——ちえつ、——鈍刀さへ無いのだ、——忌々しい。

第三場

アンドレエス登場。以前の人物。

アンドレエス (は入り來ながら) 暑いなあ。(襟巻を外つて) 今晚は。(銃の
曳金の邊に襟巻を捲きつけ、傍に立てかける、誰でも觸つては不
可よ、装填めてあるから。(亭主の方へ) 何だか知らんが、斯う、心
持が悪くて堪らない。僕は爰で弟を待つのだ。

亭主 何卒、御ゆるりとお休みなさいませ、山林の助手のお方。

アンドレエス 未だ非ルヘルムは來る時以でないな。(腰かけて、手を卓
の上に投げ出し、其上に頭を凭せて俯向く。)

フライ (コップを卓の上に音させて) も一杯、御亭主。今日まではま
だ錢になるから、此店で飲んでやるよ、乃公等の情てえもんだ。

物の七八日も経てば、乃公等のやうに眞正直な人間は、一文だつ
て、もう、仕拂ふ事あ、要らねえんだ。然う言つて聞かしたかう。

リンデンシユミイド (此時、アンドレエスに目も離さず、顔と銃を見くら
べて) 眠り込むと可いがな、此奴。——(卓越しにフライの方へ顔を
伸して) 寂寞谿だつて手前は云つたな。——而て確かに罰は受けねえ
か? もう確か?

フライ 取越苦勞するない。手前が萬一捕つたら、乃公を一生涯恨む
ばかりよ。忠實とか正直とか云ふのは、昔の婆さん達が附會けた

事よ。男子の一言なんて信じてる奴あ馬鹿だ。だから乃公は他の
関を出れや、もう信用して考へちや居ねえのさ。平民は平民だか
ら有難ていのだ、それを貴族なんて奴が、兎や角云ふのは手前も
知つてるだらう。學者が其様な事には精しいよ。

リンデンシユミイド (フライを隅に連れて来て) だが、大丈夫かい、書物
獵師をやつつけてさ。公爵領地の騷動まぎれに大丈夫かね?

フライ 取越苦勞は止しねえ。其の他には乃公はもう何にも云はねえ。
リンデンシユミイド 乃公も其事は考へてゐたがね、平常は此様な事は口
に出されるものか。

フライ 貴族が、平民に對して、天堂だの地獄だのと牽強けやつて、
兎は神様が、自分達にだけ、特別に、造つて下すつた様な量見を
してをる。金持共ばかり榮耀榮華に暮したつて、貧乏人が何とも

云ひ得ずに、それで安心してるやうに、彼奴等あ良心といふやう
なものを、幼い時から、貧乏人の心に注ぎ込みやがつたのだ。

リンデンシユミイド おい、ちや、彼奴は寂寞齋に居るんだな?
亭主 (氣が付まかける)。

フライ で彼奴とは誰のことだ。
リンデンシユミイド 彼奴のことさ、それ、——(鈕をつめる)。

フライ 手前は何處へ行くのだ
リンデンシユミイド 世の中が變る前に、負債は返済しておくのよ。(アン
ドレエスを窺見ながら、左手を衣囊に入れて、錢を出さうとする)
こいつ中々出やがらん、——

フライ 貴様の左の指は、筋でも釣るのだらう、——
リンデンシユミイド (身振を真似て) 右の手は斯う曲つてしまふからねと

曳金を曳く爲方。

フライ (意味のある事とは氣も付かず)。ぢやあ流麻質斯か？

リンデンシユミイド (頂聲で笑ひながら)。マアそんなことよ、鉛の流麻質

斯だ。二斤の火薬と三つの散弾の紀念よ。(アンドレエスを覺まさ

ぬやう、愈低聲に)あの寂寥谿の奴からね、――

フライ 書物獵師にか？

リンデンシユミイド 乃公がな、須田良尾村の山林の鹿を盗んで、錢にし

たからよ。生きた錢が澤山山林にや驅けまはつてゐる。

フライ も一杯呉んな、御亭主。(コップを出す)。

リンデンシユミイド (我を忘れて 舞臺の前へ来て)。六度、乃公は、彼奴

を持伏したんだが、そんな時は、不思議に通行らない、また其の

頃は、良心といふ奴が流行つてゐたんだ。今は不可えと考へ直し

ちや延引し延引し、屹度好い時が、自然と来るだらうと思つてゐ

たのよ。夜も魔されて眠れはせず、體は瘦せる、彼奴を殺す事が

出来ねえから。ところが、何うだい、――今は。はつ――

(痙攣るやうに軽く笑ひ、自分の考へをふいと氣付き、愕いて四邊

を見まはす。)

フライ 貴様、そりや今のは笑つたのか？

リンデンシユミイド 何うだか、知らねえや。

フライ 變な笑ひ方をするやつよ。一緒に行かねえか、公爵領地へ、

乃公と一緒に？

リンデンシユミイド (フライの肩を軽く打て。哥兄、もう自由の世だな。

乃公にや乃公の行く道があらうぢやないか。

フライ それぢやあ仕方がねえや。(奥の亭主の方へ行つて)總計で幾何

になるんだ。此で剩錢をくんな。……
 亭主 ええと、三十錢、四十錢。——
 リンデンシユミイド (今誰も自分を見て居らぬを幸ひ、アンドレエスの銃を盗んで、戶外に出て、一目散に逃げて行く)。
 フライ 何時だね？ 御亭主。
 亭主 今八時を打ちました。
 フライ (出て行く)。さよなら。

第四場

亭主。アンドレエス。
 アンドレエス (愕いて)。八時？——ぢやあ、非ルヘルムはもう来る筈だ。
 亭主 (アンドレエスを勞る様に、近寄りて)。貴方は正直なお方ですね。

僕や貴方を心配したよ。今出て行つた奴等は、恐ろしい手合でさね、非道い事を話してましたよ。書物獵師が酔つぱらつて、寂寥路に蹣跚していると、それで、彼の、大の敵のリンデンシユミイドが、其の後を尾けやうと云ひましたつて。話の間に、食指を曲げてね、何とかするつて云つてゐましたが、彼奴等は何様な事だつて、爲兼ねない奴ですからな。

アンドレエス リンデンシユミイドが、書物獵師を殺さうといふか？
 亭主 いえ、僕が然う云ふのぢやありません。萬一密告でも爲やうもんなら、それこそ、僕の家なぞも、焼き拂つて了ひませう。と云つて、黙つても、——(歩み出す)。
 アンドレエス (立たうとしたが、又、腰かける)。彼奴のために？——否、彼奴には何うなつたつて關つた事ではない。僕は彼奴を助けに行

かうてんぢやないが。

亭主 まあ、何うすりや好かつたのでせう。

アンドレエス 僕の親父は毎に云つてをるよ、人を救はにやならぬ場合には、救はなくてはならぬ。救つた後で、誰を救つたか、調べるのだと。

亭主 でも、儂が貴方に、密告したといふ譯ぢやありませんよ、ね、

貴方。

アンドレエス (決心して急に立あがり) 僕は行つて、書物獵師を見つけて來なくちやならぬ。井ルヘルムは一人でも大丈夫だらう。家まで辛と七八丁だから。何だか忘れたやうだな、あ、襟巻だ。何うも蜂谷が痛むな。何處に置いたか知ら、——然うだ、銃に捲いておいたつけ。(銃が無いので) やつ銃は。

銃が見えませんか？

アンドレエス 爰に立掛けて置いたが、黄色い革紐の着いたのだ。

亭主 儂も先刻に見ましたよ。

アンドレエス お前様、それとも藏つておいてくれたのぢやなからうか。

亭主 儂が？ 觸りも致しません。事によると、彼のリンデンシユミ

イドが、——貴方は眠つておいでるし、儂は又、丁度勘定してゐた時ですから、——まあ、何うしたら可からう。

アンドレエス 可いよ、關はぬ。僕は銃は持たずに行く。家へ歸つて外

のを持つて來る時間はない。

亭主 でも、銃を持たずに、貴方、——

アンドレエス 可いよ、心配するに及ばない。たゞ、此の胸が、變だ、

嫌な心持がする。(戸口へ來て) もう後くなりはしないかしら、(戸外

で御亭主、さよなら。(兩人共、右と右へ退場。)

舞臺廻る。

寂寞谿。

繪のやうに美しい谿谷。下手を流るゝ小川、向岸の岩の上を、川に沿うて峻しき狭路。黄昏時。

第五場

ローベルト、銃を肩に掛け、少女カトリ子と共に登場。

カトリ子 何て怖い所なんでせう。お邸から大分来ましたね。ここ、何といふ所なんでせう？ ローベルトさん。

ローベルト 寂寞谿さ。

カトリ子 寂寞谿ですつて？ ちやあ、彼の公爵御領から、山賊がよく出ると云ふ、あの、物騒な所なんですか。——心配さうに四邊を見まはす。

ローベルト 大丈夫だ、カトリ子。斯様な確りした同伴があるから。(其の銃を軽く叩いて)彼方さ、そら、見えるだらう。
カトリ子 何だか白い壁のやうなものが見えますわ、薄黒いのは窓なんでせう。

ローベルト 彼が山守の宅だ。
カトリ子 然うですか？ まあ安心しました。あの、棟の上に、鹿の角が西を向いてゐますわね。

ローベルト ちやあ、此の手紙をやるからね、そんなに、露骨に手に握

つちや不可いよ。——お前、何とか言譯は知つてるかね、万二山守のお爺さんにでも出逢たら何うする。

カトリチ (少し頬を染めて、心地よさうに笑ひながら)。ロベルトさん、小娘だつて、然う馬鹿にやなりやしませんわ。大丈夫ですか、御安心なさいませ。妾の妹が、あの、マリイさんの所で編物や縫物のお稽古をしましたからね、——

ロベルト (見てゐた手紙をたゝんで)。では、これをね、カトリチ。だが、マリイさんか、お母さんに、必ず手渡してくれなくちや不可いよ、他の人には誰でも不可よ、アンドレアスでも、井ルヘルムでも、不可よ、たい、マリイさんか、お母さんに限るんだよ、可いか。

カトリチ (でも、まだ遠いのに、妾一人で行くんですか。

ロベルト やつと十丁位ゐるだ。僕は近くに行つて見つかると不可いから。——歸途には街道を行くと怖くないよ。だがね、万一その手紙を渡す事が出来なかつたらまた此處へ戻つてくるんだよ。可いか。
カトリチ (でも、貴方去つてしまつては嫌よ。
ロベルト (何去くもんか爰に必ず待つてゐるよ。
カトリチ (行く)。

第六場

ロベルト 一人。後、書物獵師。最後に、メラア、二人の足をつれて登場。

ロベルト (少時カトリチの行くのを見送つた後、歩き出して)。来るだらうか知ら。父を捨てて僕の爲めに來て呉れるか知ら僕は獵師で

世間を渡る。僕は年も若い、力もある、自分の仕事は悉皆心得てゐる。——何、成功せぬ事があるものか。(空想に耽りて)——そして、僕が山林から歸つて来る、日中の仕事に疲れて、——すると、マリイさんは僕を待つてゐる。——そして迎へて呉れる。——銃をはずして、——それから、何やかと世話をして、銃は壁にかける。——して、僕の山守住家は彼の家の通りに出来てゐる。——戶外には木の葉がそよそよしてゐる。僕はマリイさんを抱いて悦ぶ。此の幸福は自分に感謝すべき幸福なのだ。——それから、また、——(銃聲一發。彈丸は近くに落ちる。ローベルト空想より覺む。)

ゴットフリイド (まだ樂屋の方で、高く呻つて)。人殺し。

ローベルト や、何だらう?

ゴットフリイド (舞臺へよろめき出て来る。ローベルトは馳寄つて抱く。)

儂あ、——儂あ、——

ローベルト ゴットフリイド。大變だな。お前撃たれたのか? おおい、誰か居ないか? おおい、助けてくれ。

メラア (樂屋の内)。さ、速う、お前達、彼方へ。岩徑の方から聲がする。

ローベルト 彼方から来るわい。此處だ、こゝだ、助けてくれ。

メラア (まだ樂屋で)。ローベルトさんの聲だぞ。

ローベルト 助かるもんなら、急ぐ来てくれ。(呻つてゐる書物獵師の上衣と短衣の釦をはづす。)

メラア 然うだ、貴方、若旦那。(二人の人足をつれて登場。) ても、まあ、——

ローベルト メラア君か。これを御覽、何事だらう、——まだ生きてるか?

ゴットフリイド。

ゴットフリイド まだ、——だが、——

メラア (進み寄つて)。書物獵師だ、こりや大變。

ローベルト 暗討にされたのだな。弾は背中を突き貫けてゐる。

メラア ゴットフリイド、云へ、おい、誰がしたのか、——

ゴットフリイド 彼奴が、——銃、——黄色い革紐の、——

ローベルト アンドレエスの銃か？

ゴットフリイド 彼奴が、——乃公に、——脅かしやがつ、——

ローベルト 其様な事がある筈はない。

メラア ゴットフリイド、アンドレエスが爲たのだつて？

ゴットフリイド 彼奴じや、——アンドレエスじや、——むう、——

メラア 最早駄目ぢや。(少時ひつそり)。おい、お前達、死骸は彼方へ

持つておいで。而して、貴方、ローベルト様、此邊は人殺し等の巢窟です。お來でなさい、さ、お來でなさい。まだ此邊には隠れて狙つてゐますよ、はじめ、彼のやくざなワイラアにも出逢ました、銃を持つてゐました、忍んで様子を窺つてゐるのです、それはもう分明りきつてゐます。一揆を起したに違ひありません。お來でなさい、さ、おや、ま、何故貴方はお來でなさんのでせう？

ローベルト お前先生へ行くが可い。

メラア でも、貴方は何をなさらうといふんです？ また、此様な危険な所に、貴方を一人残して、親旦那から儂は、——お伴れ申さなかつた日にや、何様に、——儂は何と貴方に申上げたと思召すでせう。

ローベルト　ちやんと其處に證人が居るぢやないか。否と云つたら否だ、
 僕は此處に残る。(足に力を込めて歩み出す)。
 メラア　ではお前達來い、若旦那の詞は聞いてくれたらうね。(行きながら)大變な事だ。何うなる事か。(二人の人足は死骸を擔ぎ、メラアと共に退場。)

第七場

ローベルト一人。後、アンドレエス。最後にリンデ
 シュエミイド。

ローベルト　破廉耻極る。アンドレエスは、此様な卑劣な復讐をするやうな人間だつたのか。僕は何うしても此事を眞實と思はぬ譯にや行かぬ、信せねばならぬのだ。書物獵師が云つた、アンドレエス

が脅かしたと、あの銃ならアンドレエスのに違ひない、みんな眞實だ。彼が此處で死んだ。此處でだ。血で以て芝生に然う書いたも同然だ、疑を挿挟む餘地はない。此様な人間が、僕と僕の幸福の間に混つてるのか。嚴然しろ、非常手段が要るぞ。何様な非道い事でも演りかねぬ奴どもと、事をせねばならぬぞ。
 誰だらう、來るのは？　彼奴自身か？　アンドレエス、(未だ見えぬアンドレエスの方へ向つて行き)さ、來い。乃公を探してゐたが？　人殺奴。乃公は書物獵師のやうに暗打は喰はんぞ、銃も持つてゐるぞ。

アンドレエス　(顔色蒼白め、よろよろして登場)書物獵師、ではないのか？
 ローベルト　彼方へ人足が運んで去つた。彼は殺された。貴様に殺され

た。

アンドレエス (憤激して)。ナニ乃公に？ こらつ、ローベルト。

ローベルト 彼が貴様を認めたと云つた、銃も貴様のぢやないか、貴様の良心も、顔に白状をしてゐるぢやないか。

アンドレエス 先づ、乃公の言ふ事を聞け、——怪しからぬ、——

リンデンシユミイド (岩徑の下手から忍び来る)。

ローベルト 逃げ去せろ、人殺しめ。寄つて来れば、一步一步、斷頭臺に近くのだぞ。此處に貴様を責める血が流れてゐるのだぞ、青ざめた、其の顔の、白状してゐる態を見る、熱に慄へてるのが何よりの證據だ。

アンドレエス 貴様こそ熱にうかされて、其様な塵語を吐いてゐやがつて、この、耻知らずめ。銃は山賊のリンデンシユミイドに盗まれ

たのだ。彼奴が、書物獵師を狙つてゐたから、乃公は其事を聞かぬや否や、追つかけて来たのだ。眩暈がして、残念で、卒倒した。——無理に立上つて、来て見たが、——

ローベルト では、彼のリンデンシユミイドが、——

アンドレエス 信せぬのか、彼方を見る、そら、岩徑の方を、——

ローベルト 人殺め、止め、逃るなら射殺すぞ。

リンデンシユミイド (岩徑を上手へ逃げる)。

ローベルト (其の後を追ふ)。

アンドレエス (よろめきながら、又其の後より、追ふやうに行く)。

ローベルト、警戒しろ。彼奴は捨鉢だから、——何うかすると、命にかゝるぞ。

リンデンシユミイド (樂屋の方で聲)。止め、乃公が撃殺してやる。

ローベルト (同じく樂屋で) 銃を捨てろ、止れつ。
アンドレエス 撃たぞ、——側へ除け、ローベルト。(二發續けさまに鳴る)
巧くやつたつ。(リンデンシユミイドは籠の中へ陥ち込む。)

舞臺廻る。

シユタイン邸の場。

第八場

シユタイン心配さうに入り来る。次にバステアン。
最後に僧登場。

シユタイン メラアはローベルトを探すのを忘れたのか知らつ? それ
とも、悴は? ——彼奴アンドレエスとおつはじめはせぬかな。お

い、バステアン。

バステアン (戸口に來る)。

シユタイン 番頭は何處へ行つた?

バステアン 夕方から製鐵所へ。

シユタイン ローベルトも、晝過からまだ歸宅らぬか?

バステアン ローベルト様は旅仕度して、カトリ子と何處かへお出にな

りました。

シユタイン (去けと目くばせする)。

バステアン (退場)。

シユタイン 和尚様も未だ來ぬな、——既う、疾うに濟して歸られさうな

ものだ、——

バステアン (戸口に來て) 和尚様がお見えになりました。